# 明日に生きる

## ―作文コンクール入選作品集―

## 第25号

平成26年度

**東京都産業教育振興会**

## 表紙デザイン

画用紙の色は私たちが目指す職業や夢を表現しました。
その夢に向かって私たちが手を伸ばしているところです。

足立区立第十二中学校
2年　石塚　沙樹

# 明日に生きる

第二十五号

―作文コンクール入選作品集―

# 明日に生きる　第二十五号　―　作文コンクール入選作品集　―

## 目　次


講評

成長の糧は生活の中に　中学校の部　選考委員長（足立区立第十二中学校長）　杉浦伸一　1
選考をとおして　高等学校・専修学校の部　選考委員長（東京都立府中工業高等学校長）　瀧澤勝　2
表彰式の記念写真

中学校の部　ページ

最優秀賞　九割じゃダメなんです　世田谷区立喜多見中学校　三年　横内琴音　5
優秀賞　ものは友だち　大田区立大森第一中学校　三年　菊地崇太　6
優秀賞　しおり　大田区立大森第六中学校　三年　後藤健斗　8
優秀賞　伝える仕事　葛飾区立一之台中学校　三年　久能裕加　9
佳作　夢のオリンピック　中央区立晴海中学校　三年　大槻涼香　11
佳作　壁　新宿区立西早稲田中学校　二年　末吉楓　13
佳作　幸せ　墨田区立吾嬬立花中学校　三年　亀田百合花　15
佳作　働くことの喜び　品川区立小中一貫校荏原平塚学園荏原平塚中学校　二年　永井風也　16
佳作　「つくる喜び」とは　大田区立大森第六中学校　一年　阿部悠人　18
佳作　他人の笑顔　世田谷区立喜多見中学校　三年　平山佑　20
佳作　体験を生かす　中野区立第七中学校　三年　阿部優花　21
佳作　言葉のない命　中野区立第七中学校　三年　伊藤瑞喜　23
佳作　職場体験を通して学んだこと　北区立赤羽岩淵中学校　三年　遠藤七瀬　24
佳作　頑張る人に夢を与えたい　葛飾区立堀切中学校　三年　加藤太一　26

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 佳作 | 体験を未来に繋げて | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 二年 | 井上　明香 | 27 |
| 佳作 | 見えない『バックヤード』 | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 二年 | 齋藤　舞 | 29 |
| 佳作 | 感謝する | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 二年 | 廣瀬　由梨佳 | 31 |
| 佳作 | いのちをあずかる | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 二年 | 細田　夏花 | 32 |
| 佳作 | 心の強さ | 東京都立大泉高等学校附属中学校 | 二年 | 山田　才 | 34 |

## 高等学校の部

| | | | | | ページ |
|---|---|---|---|---|---|
| 最優秀賞 | モノづくりの心を受け継ぐ | 東京都立農産高等学校 | 二年 | 加藤　幸乃 | 36 |
| 優秀賞 | 笑顔 | 愛国高等学校 | 三年 | 下司　結香 | 37 |
| 優秀賞 | 経験を武器にして | 東京都立瑞穂農芸高等学校 | 二年 | 関根　愛衣子 | 39 |
| 佳作 | 素敵な瞬間を見て―私の目標 | 愛国高等学校 | 三年 | 上野　愛恵 | 41 |
| 佳作 | 看護実習を体験して | 愛国高等学校 | 三年 | 奥村　沙希 | 43 |
| 佳作 | 夢 | 愛国高等学校 | 三年 | 杉本　莉佳子 | 45 |
| 佳作 | 病院実習を行って | 愛国高等学校 | 三年 | 畠山　花香 | 47 |
| 佳作 | 未来のレール | 岩倉高等学校 | 三年 | 青島　圭汰 | 49 |
| 佳作 | 私が鉄道実習を通して学んだ事 | 岩倉高等学校 | 三年 | 安部　康介 | 50 |
| 佳作 | 学んだことは「2つの心」 | 岩倉高等学校 | 三年 | 野口　雄太郎 | 52 |
| 佳作 | 体験してこそ見えた世界 | 岩倉高等学校 | 三年 | 宮﨑　和幸 | 54 |
| 佳作 | 農業で知った作ることの喜び | 東京都立大島高等学校 | 三年 | 影山　雅晃 | 56 |
| 佳作 | 商いと人とのつながり | 東京都立第一商業高等学校 | 二年 | 石田　麻奈美 | 57 |
| 佳作 | 夢への道のり | 東京都立農芸高等学校 | 三年 | 田中　愛里 | 59 |
| 佳作 | 酪農体験で知る | 東京都立農産高等学校 | 三年 | 石田　凌 | 61 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 佳作 | 動物と生きる | 東京都立瑞穂農芸高等学校 | 一年 太田 しゅう | 63 |
| **専修学校の部** | | | | **ページ** |
| 優秀賞 | 回り道をすること | 青山製図専門学校 | 一年 横堀 圭亮 | 64 |
| 佳作 | 専門教科を通して学んだこと | 青山製図専門学校 | 一年 三木 遼太 | 66 |
| 佳作 | 学習に対する心構え | 青山製図専門学校 | 一年 宮島 真美子 | 68 |
| 佳作 | 将来の夢 | 中央工学校 | 一年 藤原 誠也 | 69 |
| 佳作 | 私の職業観 | 日本工学院八王子専門学校 | 二年 加藤 理恵 | 70 |
| 応募校等一覧表 | | | | |
| 作文コンクール選考委員名簿 | | | | |
| あとがき | | | | |

講　評

# 成長の糧は生活の中に

中学校の部　選考委員長
杉浦伸一

本年度は、二十八校百三十四編の応募があり、その中から一次審査、二次審査を経て十九編が入選作に選ばれました。

作文の内容は、技術・家庭科のものづくり学習や職場体験、勤労体験、ボランティア活動などの体験的な学習をもとに将来の進路や職業人としての夢や心構えを述べるものでした。

選考基準は、経験や体験に基づく新しい視点、独自の見方や考え方が述べられ内容に魅力があるか。文章構成にまとまりがあり主張に一貫性があるか。文字表記などが適切で文体が統一しているか。などを総合して評価、審査を行いました。

どの作品も内容の趣旨を踏まえ、普段の生活の中から中学生らしい純粋な心と感受性でしっかりと物事をとらえ、評価し、それを実生活で活かそうとする意欲に満ちたものでした。

今回、最優秀賞に選ばれた横内琴音さんの「九割じゃダメなんです」は、各材料がどこからどのような過程を経てここに集ったのかを想像しながら、自分の手で有用なものを工夫し創造しながら完成させるものづくりの魅力が語られていました。その想いは、さらに他の人に役立て喜んでもらいたい追究に発展しています。ものづくりに対する心の成長がうまく表現されていました。この考えは、まさに「ものづくり大国、日本」を築き上げてきた先人（職業人）の精神そのものだと思います。以下、優秀賞に選ばれた菊地崇太さんの「ものは友だち」は、もったいないという表現を使って、いろいろな知恵の詰まったモノを友達のように愛着をもって大切に扱おうと訴えました。久能裕加さんの「伝える仕事」は、保育所のボランティア体験で保育士が園児を「叱る」「注意」することは、園児が成長するための大切な保育士の仕事であると気づき、自己の成長につなげました。後藤健斗さんの「しおり」は、障害者福祉施設の職場体験で、障害者の方と真剣に向き合うなかで相手を思う「真の思いやりの心」を耕しました。

このように、本作文には、都内各地で中学生が普段の生活の中で感じ・考え・感動したことを成長の糧と捉え自己の成長つなげていこうとする価値ある体験が多数綴られています。この作文がより多くの生徒の目に触れて影響を与え、新たな感動体験が誕生することを願っています。

最後に、作文コンクールに応募してくださった生徒の皆さん、ご指導いただきました各学校の先生方、貴重な体験を生徒に与えてくださった保護者・地域・事業所の皆様に心より感謝申し上げますとともに、日本の産業界の発展のため、明日を生きる若者たちに向け将来の職業人育成に長年ご尽力いただいている本取組がますます発展しますことを願いまして講評といたします。

# 選考をとおして

高等学校・専修学校の部　選考委員長
瀧澤　勝

今年度、高等学校、専修学校の部では、高等学校一六校から一〇六編、専修学校四校から二三編の作文応募があり、その内容も分量も十分で、大いに選考委員の頭を悩ましたところです。

選考委員会で慎重に審査した結果、高等学校の部では最優秀賞一名、優秀賞二名、佳作十三名の計一六名、専修学校の部では、優秀賞一名、佳作四名の計五名を入選者として決定いたしました。

応募いただいた作文は、ものづくりについての作文や実習での体験を基にした作文、普段の学習からの作文等、様々なテーマで応募をいただきました。また、作文一編一編から、応募いただいた皆さんの息遣い、心や行動の変化、気概が伝わり、選考委員に感動を与えました。

高等学校の部で最優秀に選ばれた「モノづくりの心を受け継ぐ」は祖父の生き方、ものづくりの精神を受け継ぐ決心がよく伝わってきた素晴らしい作文でした。

また、優秀賞の「笑顔」は、看護実習における、心の移り変わりや体験で得たことが読み手の心の中に「すー」と入ってくる作品でした。「体験を武器にして」は、鶏の飼育を通しての命の大切さ、命をいただくことへの畏敬と感謝の気持ち、自己の進路への決意がよく表現されている良い作文でした。

専修学校の部で優秀賞に選ばれた「回り道をすること」は、実社会を経験したのちに自分自身を見つめなおし、自分が本当にやりたいものは何か、答えを見つけ、モノづくりと建築という世界、今まで学んだことに後押しされ、新たな道に踏み出す心意気が伝わってくる良い作文でした。また、学習に対する姿勢や将来に対する挑戦、意欲に満ちた素晴らしい作文でした。

さて、作文コンクールですが、この間、多くの生徒・学生の皆さんから応募をいただいています。特に、昨年度と比較し、手書きでの作文応募が増加した印象を受けました。その結果、今年度の入賞作品の多くが手書きによるものでした。選考委員会としては、手書き、ワープロに特段の区別なく、内容や表現等に重きを置いて選考いたしました。

選考をとおして特に感じたことは、普段の学習の中で得たこと、体験から得たことを、文章や言葉で表現することや、読み手や聞き手に自分の気持ちや感じたことを伝えることの難しさを、多くの応募者が克服し、表現力を身に付けてきている、ということです。今回の作文コンクールへの応募体験から得たことを今後の学校生活や実社会の中で生かしていくことにより皆さんのさらなる飛躍を願っています。

最後に、作文コンクールに際し作文を応募していただいた生徒・学生の皆さん、本当にありがとうございました。また、ご指導をいただきました各学校の先生方に感謝いたします。

平成 26 年度　作文コンクール表彰式（中学校の部）　12 月 19 日　　東京都産業教育振興会

平成 26 年度　作文コンクール表彰式（高等学校・専修学校の部）　12 月 19 日　　東京都産業教育振興会

## 中学校の部　最優秀賞

# 九割じゃダメなんです

世田谷区立喜多見中学校　三年
横内琴音

私は普段はスマートフォン片手にテレビゲームのコントローラーをあやつるようなデジタルの海を漂っているタイプの人間です。普段はそんな私ですが学校の技術や美術で色々なものを作るときには消費電力ゼロの原始的作業に没頭します。のこぎりで板をカットしたり彫刻刀で柄を削り出したり、やり直しができない緊張とリアルに出てくる結果は現実世界にしかない驚きと嬉しさが詰まっています。だから私は何かを作ることが好きなのです。

学校で作った棚は音楽ディスクを入れるために作りました。大きくも小さくもなく私の部屋にぴったりのサイズです。美術で作った時計はこんなデザインのものが売っていたら買うのにと思うデザインを彫りました。時計盤の世界を旅するイメージで秒針の先が飛行機になっているパーツを私は選びました。

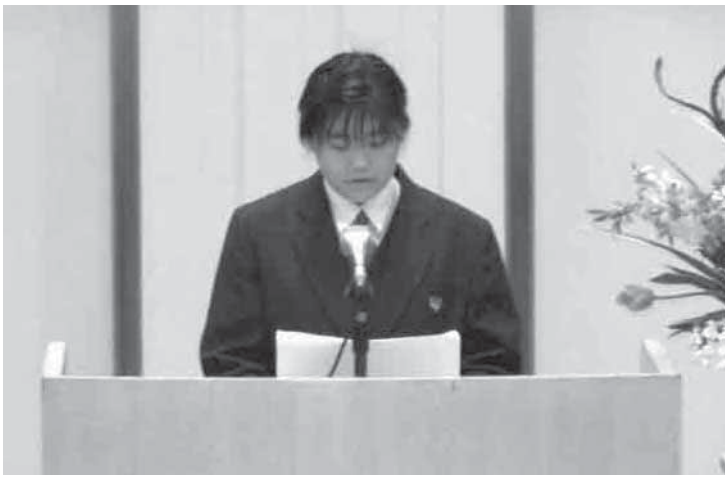
一から作るのはとても大変ですが制作中は音楽ディスクをどの順番で並べようとか、時計はどこに置こうかなど完成した後のことを想像していて飽きることがありません。完成して部屋に置いたとき満足感は終わることなくものに宿ります。ものを作る喜びは自分で自分の欲しかったものを作って得られるということです。

完成した作品を見ていて不思議なことを感じる瞬間も私は大好きです。この木はどこの山に生えていたのだろう。このビス原材料の金属はどこの山で採掘されたのだろう。地表で育った樹木と地中で眠っていた金属と東京で育った自分。三者が出会い今、ここで私の部屋で私のお気に入りのモノになっている。小さな地球がここにあるように思え何だかうれしいと感じるのです。

私には作ってみたいもう一つものづくりがあります。それは自分のためにつくるのではなく誰か知らない人にものを作って提供したいという希望です。

今はとても恥ずかしくて自分の作ったものを他人にあげるなんてことはできません。技術もないし知識も不足しています。

学校のテストなら九十点とれば褒めてもらえますが誰かに提供する商品だったら完成度九十パーセ



中学校の部　最優秀賞　横内琴音さんの朗読

ントのものなんて商品とは呼べません。九割くらい正確に動いている時計を身に着けているパイロットは一人もいません。十回のうち九回しかブレーキが効かない自動車が売っていたらどんなに安くても見た目がかっこよくても私は買いません。

　ものを知らない誰かに届けるということはとても大変で厳しいことなのだと思います。作ったものがきちんと機能しているのか、持ち主を傷つけるようなことがないのか検証したりしなければいけないと思います。そこまでいくにはまだまだ勉強が必要ですし色々な人の意見を聞いたり話し合ったりすることもとても重要なのだと思います。技術だけではなくコミュニケーションも身に付けていきたいと強く思っています。そして社会がどのようなものを望んでどんなものだったら人は便利だと思うのか感じ取れるようになりたいと思います。そして将来は色々な世代や分野の人と関わりチームで何かを作りたいです。そして完成したとき作ったみんなで完成を喜びたいし、知らない誰かに作ったものを手に取って喜んでもらいたいです。

## 中学校の部　優秀賞

# ものは友だち

大田区立大森第一中学校　三年
**菊地崇太**

「もったいない」

　この言葉のように、持続可能な社会の構築に深くかかわる言葉。

　ぼくにとって、それは「ものは友だち」だ。

　今、技術科の授業で合金を使った鋳造を行い、鋳物を作っている。常温で液体の水銀は見たことがあるけれど、金属と言えば固体というイメージが強いので、鍋とガスコンロで金属が溶けていく様子は、正直驚いた。一度、鋳型に流しても、うまく型どりができず、設計通りの作品にならなければ、もう一度溶かしてやり直してもいいよと先生はおっしゃっていた。世の中でも、製品としての役目を終え、資源ゴミとして回収された金属は、もう一度資源に戻され、また新たな製品として活躍している。これを再資源化、つまり、リサイクルというんだよとも教えてくれた。一、二年生の授業では、木工製品や生物の育成を行ってきたが、失敗した場合の修正方法はあっても、再資源化という発想はなかったので、正直驚いた。

　ある日の技術の授業の課題で、こんな課題が出された。

ケニア人女性のワンガリ・マータイさんは、日本に来日した際、「３Ｒ＋Respect ＝もったいない」が世界共通語になれば、環境に優しい社会がさらに実現されるといっているが、あなたにとって、持続可能な社会の構築に深くかかわる言葉はありますか。

家で、この課題に取り組んでいた僕は、とても困ってしまった。常に考えていることと言えば、大好きなサッカーのことで、環境について考えるのは、親が「節電しなさい」と言ったときくらいである。正直途方に暮れてしまった。結局、目の前にあった、使い古しのサッカーボールを手に取り、現実逃避をしようとしたとき、ある出来事を思い出した。

昨年の3月、所属しているサッカーチームの試合で、僕のボールが試合球として使われたのだが、グランド脇の荒川に流されてしまったのだ。買ってもらったばかりのボールだったから、ショックだった。そんな僕を見て、かわいそうに思ったのか、すぐに新しいボールを買ってもらえることになったので、流されたことすら、すぐに忘れていた。それを思い出したのは、一年後の今年の3月だ。僕のボールを拾って、家まで送ってくれた人がいたのだ。「まだ使えるのに、もったいないし、サッカー選手にとってボールは友だちだから。」という思いからの行動だったそうだ。

「ものは友だち」という気持ちから、ゴミにならずに拾われたボール。このような体験は珍しく、日常的によくあることではない。しかし、ものと人とが、友だちのような関係になれば、ものは大切にされ、結果長持ちすることに気付いた。このような体験から、僕にとって「ものは友だち」という言葉が、持続可能な社会の構築には大きい意味を持つ気がしている。

そう思えるようになった、僕の授業への取り組み方が変わった。目の前の作品をきれいに仕上げようという気持ちだけでなく、完成後にどのように使われていくのか、未来のことも考えるようになった。

ものづくりに使われている材料やエネルギーについて考えてみると、最小限の材料で仕上げなければと思うようになった。それには、失敗しないことや精度をあげることもかかわってくる。だから、丁寧に仕上げようと思えるようになった。

このように、僕のものづくりへの視野が広がったのは、先生が問いかけてくれたからだ。きっと先生は、ものを作ることに重きを置くのではなく、それに関わり、つながっているさまざまな事柄を十分に考慮することが、僕らの未来のものづくりを守ることになると伝えたかったのだと思う。

あなたにとって、持続可能な社会の構築に深くかかわる言葉はありますか。僕にとって

のそれは、「ものは友だち」だ。戻ってきたあのサッカーボールをこれからも大切にしていきたい。

# しおり

大田区立大森第六中学校　三年
**後藤健斗**

「どうして良いかわからない。」「どう接したら良いかわからない。」この言葉を心の中で独り言のように繰り返しながら、僕の職場体験は始まりました。

僕は、昨年、障害者福祉会館で職場体験をしました。そこでは身体の不自由な方が百名位働いていました。正直、身体の不自由な方々がこんなにもいらっしゃる事にびっくりしてしまいました。そのような戸惑いの中でまずは挨拶からスタート。ここまでは準備もしていたし、問題なかったのですが、ここからです。前に言っていた独り言が心の中で繰り返されたのは。相手の方々とは目も合いません。目が合わないと表情も読み取れず、僕は受け入れられたのか、嫌われたのかさえ分からないのです。そうなると不安で本当に言葉が出てこない。こんな気持ちになったのは初めてでした。

挨拶以外は何も話すことなく始まった職場体験ですが、僕が最初にお手伝いしたのは、電球の仕分け作業でした。まずは電球を目で見て傷がないかを確かめ、次に電球を振って耳で部品が壊れていないかを確認する。その繰り返しです。これを身体の不自由な方は一生懸命に行っています。最初は緊張もあったのか僕も黙々と作業をしていたのですが、ふと作業をしている方の顔を見ていると一つの事に気が付きました。それは真剣な目です。電球を見ている目。電球を振っている時に「音を聞き逃さないぞ」という目。働いている、一生懸命な姿に、仕事に取り組む社会人の目を感じました。僕達中学生とは全く違い、真剣に働いている姿勢は今でもその情景が思い出されるくらい、強く印象に残っています。僕はこの体験を通して大きく二つの事を学ぶ事ができました。

まず一つめは身体の不自由な方との接し方です。この方々は、誰より人の助けを必要としていると思います。僕も何かあったら手を差しのべたい、ボランティアに参加したいと考えていましたが、いざその場になると「どうしたら良いのかわからない」という状態でした。おそらく僕と同じ考えの方は多いのではないでしょうか。電車の中でも駅でも、「何かしてあげたい」という気持ちはあるけれど、それが不自由な方にとって嬉しい事なのか、そうでないのか。有難いと思ってもらえる事なのか、逆に有難迷惑な事なのか。そんな事を色々と考えているうちに固まって動けなくなるのです。でも僕は今回の体験を通して感じました。「普通でいいのだ」と。何か役に立ちたいとか、手伝ってあげたいと肩に力を入れて臨むから、いざとなるとどうして良いか分からなくなる。頭で色々と考え過ぎるから固まってしまう。普通でいいのだと思います。身体の不自由な方は僕なんかよりよっぽど働く意欲

がありますし、一生懸命でした。僕には得意な事も不得意な事もあります。出会った方々も得意な事も不得意な事もあるでしょう。つまり、僕らと同じなのだと思いました。僕達と違うと思っているから「何かしなくては」と考えすぎて、結局「どうして良いか分からない」になってしまう。普通に接する。背の高い人は高い所にある荷物を取るのを手伝ってあげるように。身体の大きい人は重い荷物を持ってあげるように。料理の得意な人は美味しい料理を作ってあげるように。いつも僕らが普通にしている事と同じ視点で普通に接する事が大切なのだと学びました。そのほうがいつも通りの一歩が出る気がしました。

二つめは「相手の事を良く考える」という事の大切さです。今回の職場体験での最初の壁はなかなか相手の気持ちが分からない事でした。身体の不自由な方々の想いを探るのは大変でした。でもその時ちょっと思ったのです。僕は現在、生徒会で副会長をしています。また野球部にも所属していました。どちらも意見の対立みたいなものがありましたが、その時必ずといっていいほど思う事はこのような事です。「なぜ彼はこういう考えなのだろう。僕の考えの方が正しいと思うのだけれど。」でも今回の職場体験で本当に感じたのは、相手の表情を見ながら、感じながら、会話をすることの大切さです。僕達はなぜ「相手の事も考えて、とことんまで話し合う」という事ができないのでしょうか。相手の表情を見ながら、感じながら話し合いをすることの大切さを僕達は忘れてはならないと思います。これからはもっともっと友達と意見交換をしていきたいと思います。

僕は昨年の夏に大田区の海外派遣でドイツに行ってきました。その時のドイツでお世話になった方達のお土産として皮で出来た、「しおり」が配られました。僕は、すぐに気付きました。職場体験三日目に身体の不自由な方々と作ったあの「しおり」だということを。大田区からのお土産の一つに選ばれていた事が嬉しくて、僕はその日に障害者福祉会館を訪ねました。福祉会館の職員の方にこの話をすると、「製作している人達に伝えておくよ。きっと喜んでくれると思うから。」と言ってくれました。福祉会館では職場体験以上にたくさんの事を学ぶ事ができたような気がします。

色々な想いが詰まった「しおり」は日本を超えてヨーロッパのドイツで使われています。

# 伝える仕事

葛飾区立一之台中学校　三年

**久能裕加**

私は将来、自分が楽しいと思えることにつながりのある職業につきたいと考えている。それは、仕事とは社会で自立して生きていく上で欠かせないものであり、持続できなければならず、楽しいと思える職業であれば長く続けられると思うからだ。私は今まで、仕事とは楽しさで成り立っているの

だと思っていた。だが、それだけではないのだと気がついたのは、保育所でのボランティア体験がきっかけだった。

私には、年の離れた妹と弟がいる。近所には妹や弟と年の近い子供たちが多くいるため、受験生となる前までは、子供たちが何処かへ行く時は私が保護者となり、よくみんなで遊んでいた。そういったこともあり、私は子供たちと触れ合うことが好きだった。夏休み中に保育所ボランティアがあると知った時、すぐに参加を希望した。それは、以前から保育士という仕事に興味を持ち、一度は体験をしてみたいと思っていたからだった。

夏休みに入り、受験生ということで塾と家を行ったり来たりの毎日を過ごしていた。だんだんと近づいてくるボランティア体験の日が、とても待ち遠しかった。体験日当日になり、私の頭には、子供たちと触れ合う楽しさや、保育士さんの仕事を間近で見て、それを体験できるという喜びでいっぱいだった。

ボランティア体験先の保育所で、私が担当したクラスは二才児のクラスだった。まだ二才という赤ちゃんなのだから、おとなしいだろうと思っていたが、皆一人一人違うもので、あまり言葉を話さずおとなしく玩具で遊ぶ子もいれば、よく話し、自ら積極的に友達を誘って遊ぶ子もいた。先生は、おとなしい子には友達に話しかけてみたらどうかと勧めたり、元気いっぱいに部屋を走る子には危険だからと注意していた。私が妹たちとしていた「遊び」と、保育園での「遊び」は、名前は同じでも中身は少し違っていて、保育園での遊びは、子供たちの心の成長の一歩を手助けしたり、遊びに夢中で気づかない危険を教えたりするものだった。園内にある庭に出て、みんなで蝉を探したり、植物を見たりしていた時、一人だけ先生の話を聞かずに友達へちょっかいをだす子がいた。丁度その子の近くにいた私は、その子にみんなと一緒に蝉を探そうと呼びかけた。すると、それを見ていた先生がこちらへ首を振りながら歩いてくる。その子の前に来た先生は、その子をとても厳しく叱った。

先生が子供を厳しく叱る様子を見ていて、私は自分の幼い頃を思い出していた。今では、叱られることはイコール悪いことだと頭の中でつながっているが、幼い頃は、なぜ自分が叱られるのかが分らなかった。幼い子供は、自分で善悪の判断がつけられない。大人から、多くのことを教えられていくうちに善悪の判断のつけられる人になっていくのだ。

私は、「叱る」というのは「伝える」ことだと思う。善悪の判断がつくように、その子が幸せになれるように、という願いを大人は伝えていくのだと思う。先生が厳しく叱ったのは、あの子がきちんとした大人になるためだ。今は、ふざけていて先生の話を聞かないという小さな事かもしれないが、このことが悪いと思えずに成長し、大人になってしまえば、大きな事となり自分の幸せを壊してしまうかもしれない。だからあの時、先生は首を横に振ったのだろう。あなたもきちんと伝えていかなくてはいけないよ、と言われたのだと感じた。

ボランティア体験をする前は、子供たちと触れ合えること

や、仕事の楽しい面しか意識していなかった。しかし、活動をして、先生の子供たちへの、時には厳しい姿などを見て仕事とは楽しいだけではない、大変なことなのだということを学ぶことができた。今回の活動は、私が社会に出ていく上で、大きな土台となるだろう。そして、私が「大人」となるための、大きな力となるだろう。

## 中学校の部　佳作

# 夢のオリンピック

中央区立晴海中学校　三年
大槻涼香

私の住んでいるここ中央区晴海地区は、二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックの選手村建設予定地だ。二〇二〇年までにこの地域はこれまで以上に発展していくことだろう。そして私はこの東京オリンピック・パラリンピックにボランティアとして関わりたいと思っている。

オリンピックのボランティアというのは、欧米では「ゲームメーカー」とも呼ばれ、大会や開催国の印象を大きく左右する「顔」なのだ、という記事が新聞に載っていた。東京オリンピックが開催される頃、私は大学生になっているはずだ。二〇二〇年の夏休みをボランティアとして活動することで、他では得られない貴重な経験を積むことができると期待している。

オリンピックのボランティアには様々な種類があるが、その中でも私が挑戦したいのが世界各国から訪れる観光客のためのガイドだ。決して英語がペラペラという訳ではないが、自分の限界を決めずにチャレンジしてみたい。

そもそも私が東京オリンピック・パラリンピックのボランティアをしたいと思うようになったのは、三つのきっかけからだった。

私は去年の夏にオーストラリアに九日間滞在した。オーストラリアでは、ブッシュ・ケアという海岸に生えている雑草を抜き、新しい植物を植えていくボランティア活動を行った。正直最初は、面倒くさい、やりたくないという気持ちしかなかった。しかし、ブッシュ・ケアが終わってきれいになった海岸を見たとき、現地の方が

「あなた達のおかげだよ。ありがとう。」

と言ってくださったとき、人のために働くことの喜びを身に染みて感じた。

　また、ホームステイなどで出会ったオーストラリアの人たちはみな、私のたどたどしい英語でも

「話を聞こう。」

としてくれた。私が英語の意味を理解できなくても、

「話を伝えよう。」

としてくれた。言葉の壁があるからこそ言葉だけではない、意思を伝え合おうという気持ちをより強く感じることができたのかもしれない。私を単なる異国の女の子としてではなく、同じ一人の人間として扱ってくれているという、当たり前のことがとても嬉しく感じられた。ホストファミリーからすれば、私は「他人」。他人からこんなに深い優しさを感じたのは生まれて初めての経験だった。そのときの気持ちを言葉に言い表そうとすると、のどに熱い固まりがこみ上げてくるようで、今思い出しても胸がいっぱいになる。

　コミュニケーションというのは気持ちを伝え合うことそのものだけではなくて、伝え合おうとする気持ちから始まるものなのだ。オリンピックに関わる場で私はたくさんの外国の方と交流して、あの気持ちをもう一度味わいたいと思っている。

　二つめは、学校でのＡＬＴの先生の授業だ。先生はとてもフレンドリーでたくさん話しかけてきてくださる。先生と話すことは私にとって小さな挑戦だ。

「きちんと私の話が伝わるのかな。」

「先生の話を、理解できなかったらどうしよう。」

そんな不安が脳裏をよぎる。でもきちんと自分の考えを伝えられたときや、先生の話を理解できたときは、小さくガッツポーズしてしまうほど嬉しい。小さな挑戦によって私は小さな喜びを得る。オリンピックでボランティアとして働くという大きな挑戦は、より大きな喜びを与えてくれるに違いない。

　三つめは、地域で開催されているインフィオラータに参加したことだ。インフィオラータというのは元々イタリアのお祭りだ。「花を敷きつめる」という意味の通り、道路や広場に花びらを敷きつめて絵を描くというものだ。様々な色の花びらを使って美しい絵に仕上げる。

　私はおととしの十一月、インフィオラータで東京オリンピック・パラリンピック開催誘致のために、そのシンボルマークを描いた。敷きつめたのは花びらではなく、色のついた砂を使った。東京オリンピックのシンボルマークはオリンピックの五色に、江戸をイメージした紫を加えた六色で彩られた桜のリースだ。桜のリースには

「再び戻る」

という意味があり、一九六四年の東京オリンピックのときのように勇気と活気をこの日本に取り戻したいという願いがこめられている。それと同時に、世界をつなぐ大きな輪という意味もあるのだ。

　インフィオラータの約七か月後、オリンピックが東京で開催されることが決定した。東京オリンピックの開催に私が少しでも貢献をしたようで、とても誇らしくなった。

　もちろん、オリンピックのボランティアになることは簡単なことではない。私の英語力は低いし、コミュニケーション力もまだまだだ。オリンピックについての知識も浅い。しか

し日本を訪れた人たちの助けになりたい、日本は素晴らしい国だと思ってもらいたいという気持ちは誰にも負けない。この気持ちを忘れずに、日々の勉強や部活に一生懸命取り組めば、必ず夢が叶うと信じている。英語力もコミュニケーション力もオリンピックの知識も、そして何よりも、日本の素晴らしさを外国人の方に伝えられる力を身につけたい。

インフィオラータを見て、一九六四年の東京オリンピックの想い出を楽しそうに語っているお年寄りがいた。そんな風に二〇二〇年の東京オリンピックに訪れたすべての方の心に残る活動ができるように、何年たっても色あせることのない感動を与えることができるように、これからも努力していきたい。

# 壁

新宿区立西早稲田中学校　二年
末吉　楓

この夏、私は障害者福祉センターで職業体験を行いました。そこで障害のある方と交流して、気づいたことがあります。それは、障害のある方も私たちと同じであるということです。

今回私がお世話になった障害者福祉センターでは、障害のある方がその種類等に合わせて様々な作業をしていました。私は、言語障害のために上手く話せない方や足の不自由な方などの生活介護を目的とした、「トライ工房」で手伝いをしました。

今回は、地域のお祭りに飾られる大きなポスターをちぎり絵で作ります。普段頑張っている自分たちと、今年で30周年を迎えるセンターへのお祝いの気もちを込めた大きな金メダルが描かれました。

私は、障害のある方と、一センチ四方の黄色と橙色の紙を台紙に貼りつける作業を行いました。「こんなに小さな紙を貼るなんて細かい作業ができるのだろうか……」私は不安に思いました。その方は、左手の指が無く、右手は動かないからです。彼は言いました。

「僕が紙を貼るから、ここにのりをぬって。……大丈夫、こういう作業得意だから。」

まるで私の心を見透かしたかのような言葉に、ドキッ。心臓がはねました。

言われたようにのりをぬると、彼は左手の親指と手の甲の間にはさみ、どんどんはっていきました。気がつけば真っ白だった紙は、黄色と橙色で彩られていました。すき間は少しもありません。

「すごいですね！ステンドグラスみたいできれい……。コツがあるんですか？」

私がそう尋ねると彼は、目を細めて

「それはな、紙の隅から貼っていくと良いんだよ、白い所が残らないだろう？ほら。」

と説明すると紙を貼って見せてくれました。私もそのアドバイスに従い貼ってみると、驚くほどきれいに貼ることができ、

「おぉおぉ、そんな感じだよ」とにっこり笑って誉めてくださいました。その笑顔を見ていると、なんだか胸が温かくなり、自然と笑みがこぼれ、幸せな気持ちになりました。

そして思いました。「私もこんな風に、笑顔で幸せを伝えられるような素敵な人になりたい」と。それから、始めに細かい作業は難しいのではないかと思ったことを後悔しました。自分にできることに日々挑戦し、トライする場所、トライ工房、素敵な場所です。

お昼の時間には、言語障害のある方の隣に座って食事をしました。何か話しかけた方が良いのか、どんな話をすれば良いのかわからず、戸惑い、緊張していた私に、

「それ、は、手作り、ですか？おいしそう、ですね。」と一語一語を大切に発音しながら、話しかけてくださいました。

「はい。でも作ったのは私の母なんです。」

「そうなん、ですか、末吉さんは、バレンタイン、に、チョコは、作りますか？」

「そうですね、あまり多くは作りませんが。」

するとまるでいたずらっ子のような表情を浮かべ、

「じゃあ、僕が、一つ、予約して、おきます。」

と言ってくれました。

気づけば一緒に楽しく話していました。話題はとても小さなことでしたが、私はそれに感動しました。障害があっても作業をするし、冗談も言う。私の知らない「当たり前」がありました。

よく、「障害は個性だ」という言葉を耳にしますが、今回の体験を通し、本当にそうだと実感しました。運動が得意な人、歌の上手な人、車いすを使う人、違いはないと思いました。私は無意識のうちに自分で壁を作ってしまっていました。

今回の職業体験を通し、障害のある方を、「障害者」という目で見るのではなく、「その方」と正面から向き合うことが大切であると学びました。

一人一人性格は違います。一部だけを見て、「この人はこういう人だ」と決めつけてしまうことは、良い面を少ししか知ることができません。今回学んだことは、一生の宝です。福祉の仕事も将来の選択肢の一つとなりました。今はまださな

ぎの段階ですが、たくさんのことを学び、力にして、いつか空へと飛んで行きたいと思います。

# 幸せ

墨田区立吾嬬立花中学校　三年
**亀田百合花**

「この社会で生き残る。」それは、私が生まれた瞬間からの鉄則である。苦にならずに生き抜く方法はあるのか。そんな考えを持っていた自分が今になっては醜い。

昨年、ある事に挑戦した。二年生。そんな私に先生から出された課題は、「職場体験」をすることであった。人見しりで、話すことが苦手であり、とても消極的な自分には少し難しいものであった。私は数多くある職場から図書館を選んだ。自分に自信が無くて、積極的に人と話すことが出来ない為、働いても何も得られないだろうと思いながら、丁度この時期、図書委員だったという理由で、ただ何気なくその職業を選んでいた。この頃の私はまだ大きなものを得られるとは知らなかった。

職場体験当日。事務室に入った私に視線が集まる。私は顔を赤らめながら自己紹介をした。今、スタートしたと思うと、期待に胸をふくらませたと同時に自分の心拍数が高くなり身体が震え出した。この瞬間、胃を固く締めつけるような不安の念が、無謀だと思っていた私を一気に包み込んだ。この状態のまま仕事内容に入っていった。司書の方からアドバイスをもらいながら本を整理していくなどと着々と進めていく。だんだんと気持ちも落ちついていったその時だ。誰かに肩をたたかれた。女性だ。不思議に思いながら見つめていると、「この本の場所、どこか分かる?」と尋ねられた。「ドキ。」大きな音が身体に響きわたる。私は運よく、その本の在る処を丁度整理していた為、無事に本を棚に戻すことが出来た。その女性の口がまた動く。「ありがとう。」ただそれだけの一言であったが、私は物凄く嬉しかった。それは、人に役立つ為に働く職業をやらなければ得られないもので、だからまだ社会人ではない私にはとても貴重な出来事であった。その後、全ての仕事内容を終わらせることが出来た。図書館の関係者の方々に感謝の気持ちを込め最後のあいさつをした。初めて働いて得られたもの。それは人に役立った時の「喜び」であった。それは、将来くじけそうになった時、必ず私を支えてくれると思う。

今の私には、夢がある。「イラストレーター」になることだ。小さい頃から絵を描くと自分の世界に入れるような気がして凄く楽しかった。だから、そんな職業に就けたらきっと幸せだろうなと思っている。しかし、この職場体験を通して、どれも努力しなければ得

られないと知った。自分の画力だってそうだ。周りから「上手だね。」とよく言われるが、最初から私はそんな才能を持っている訳ではない。私は小さい頃から負けず嫌いで、自分の絵は他の子の絵より上手くなりたいと思っていた。だから、動物の図鑑などを見ながら模写をしていた。今の自分の画力は、今まで積み重ねてきた努力の結晶だと思っている。また、私は努力をしたことに誇りを持っている。なぜなら、そんな経験をしてこなかったら今の自分が存在していないと思うからだ。この間までの私は自分の夢をこんなに深く考えたことが無かった。だから、もちろん夢が実現するまでの道のりが厳しいものだということを知らなかった。簡単には辿り着けない。苦にならずに行ける近道だって無い。しかし、私はこの夢に向かって進み続けたいと思っている。自分自身で作り上げた才能を無駄にしたくないから。また、その道は辛いことが起こるばかりではない。きっとあの時のように幸せだと思える瞬間があると思っている。後ろを見ず、ただゴールに向かって、大きな壁が立ちはだかったとしても、必死にがむしゃらにゆっくりと越えて行く。そしてその夢が実現したら、積み重ねてきた努力が「達成感」に変わるだろう。たとえ、この夢で辛いことが起こったとしても、今までの努力から生み出された喜びや、また、それを求める気持ちがきっと背中を押してくれる。そう信じ、私は前へ進もうとしている。

苦にならずにこの社会で生き抜く方法は無い。幸せは苦の先に存在するから。

# 働くことの喜び

品川区立小中一貫校荏原平塚学園
荏原平塚中学校　二年
永井風也

小学五年生の夏休み初日、母は私に言いました。

「三週間、ひとりでパウロのところに行って来てね。」

パウロは母の友人で、ポルトガルのリスボンでカフェテリアを経営している菓子職人です。日本で仕事があればうちに泊まるし、優しくて面白くて大好きだけど、パウロに会える喜びと、言葉の通じない世界にひとりで行くことの不安で、毎日もやもやした気持ちで過ごしました。

出発の日、成田空港で母は言いました。

「いい、遊びに行くんじゃないの。仕事をしに行くのよ。約束は、ひとつだけ。与えられた仕事を断ってはいけない。頼まれた事は、全てするのよ。いいね。」

私は、黙ってうなずきました。

パウロの仕事は、朝四時に始まります。まずは、自宅近くの工房でパンを成形し、準備が出来たら車で三十分のリスボンの店に向かいます。店に着いたら、パンを焼き始め、ケーキを作り始めます。パウロの手が動く度に、まるで魔法を使っているように次々と美しいケーキが出来上がっていきます。私は、それを見ているのがとても楽しかったです。

次の日から、私も四時に起きました。時差ボケもあったので、四時に起きるのは簡単でした。初日の仕事は掃除です。店の前を掃き、植木に水をあげ、テーブルの上を拭き、メニューを並べます。ケーキ作りに使ったボウルを洗う前に、生クリームを舐めるのが楽しみでした。

二日目は、ひとりで買い物に行きました。何を買うかわからなかったけれど、教わった通り「アグアポルファボール。セイシュ。」と言ったら、水を6本渡されました。

三日目は、ランチメニューのコピーに行きました。お店のおじさんは、この日から帰る日まで毎日発音を教えてくれました。

四日目以降、ランチの野菜の皮むき、朝食のサンドイッチ作り、クッキー作り、ケーキの持ち帰り用の箱作り、お菓子の配達、食事の配膳、食器の片付けなど、どんどん仕事は増えていき、忙しい毎日になっていきました。

そして、十日目に事件は起きました。ポルトガルでは、日本のようにケーキの持ち帰り用の箱がありません。紙を折って作ります。リーダーのシンティアさんに百個作るように言われました。紙が少し厚いので力がいるし、途中で指が痛くなったけれど、なんとか作り終わりました。その時シンティアさんは「あと五十個作って」と言いました。「えっ、なんで?これっていじめ?」私は、シンティアさんが大嫌いになり、この気持ちは最後まで変わりませんでした。

お店には、毎日沢山の人が来ます。朝食のサンドイッチは、注文が入ると私が作って持って行きます。パウロが「日本からひとりで来て、うちで働いている。これは、この子が作ったんだよ。」と説明すると、みんな驚き「おいしい!」と合図をしてくれました。言葉は通じないけれど、とても嬉しかったです。

毎日決まった時間に来るお婆ちゃんもいました。お婆ちゃんはいつも「よく働いているから、私と一緒に休憩しよう。」と言って、私を隣の席に呼びます。パウロも「行っといで。」と言ってくれるので、隣に座ってカフェをします。何を言っているのかわからないけれど、優しい声でずっと私に話しかけます。私は、ちょっと恥ずかしいような、でも優しい気持ちになりました。

日本人の観光客の人も沢山来ます。そして、いろいろなことを聞いていきます。切符の買い方、観光地への行き方、スリにあったので助けてください。一緒に警察に行ってあげることもあります。パウロと智子さんの毎日は、とても忙しいのに、丁寧に応対します。私が「そんなの案内所で聞けばいいのに。」と言うと、「人と人とのつながりは、大切にせなあかん。」と智子さんが言いました。

ポルトガル最後の夜、パウロが言いました。

「シンティアは、風也が箱を作るのが上手だし、好きなのかと思って、あと五十個頼んだんやで。」

「えっ。」

私は、びっくりしたと同時に恥ずかしくなりましたが、謝ることも出来ませんでした。いまでも残念に思います。

三週間働いてわかったことは、将来朝早く起きてする仕事も自分には向いているということ。自分のアイデアで物を作り出す仕事が魅力的だということ。そして、外国で働くことも楽しそうだということです。

あれから三年経ってわかったこともあります。外国で働くためには、言葉を学ばなくてはいけません。英語はもちろんですが、その国の母国語も少し勉強した方が良いと思います。それは、ものすごく下手でも、日本語で話そうとする外国の人に会うと、なんだか嬉しくなるからです。

コミュニケーション力を身につけることも大事です。あの時の私は恥ずかしくて出来ませんでしたが、言葉がわからなくても、身振り手振りで自分の気持ちを伝えていれば、お婆ちゃんやコピー屋のおじさんとも、もっと仲良くなれたかもしれません。「おいしい。」と合図してくれたお客さんにも、自分の気持ちを伝えれば良かったと思います。

そして、母には言えなかったけれど、私は約束を破りました。海老の頭を取り、殻をむくことを、どうしてもしたくなかったのです。これもいまでは、しなくてはいけなかったことだとわかります。

今年の夏、パウロは日本で勝負をするために京都に出て来ました。「店が出来たら、風也の力が必要だから、また手伝いに来てな。」とパウロは言ってくれました。

私は、今度こそ与えられた仕事を全力でし、言われた事だけでなく、自分から次の仕事を見つけ、人と人とのつながりを大切にしながら、丁寧に仕事をしたいと思います

# 「つくる喜び」とは

大田区立大森第六中学校　一年
阿部悠人

「つくる喜び」とは何でしょうか。自分で「こういうふうなものが作りたい。」という考えを形にするために構想を練り、設計し、そして製作をする。この一連の流れが、「つくる喜び」であると、僕は考えました。

そんな「つくる喜び」を教えてくれたのが、レゴブロックです。僕はレゴブロックが大好きで、誕生日が来るたびにプレゼントとして買ってもらっていました。今でも時々遊ぶことがあります。始めの頃はセットに付いてくる説明書の通りに組み立てたり、父に「こういうふうなものを作ってほしい。」などとねだったりしていたのですが、歳が大きくなるにつれて、自分で「こういうふうなものが作りたい。」と思うようになり、テクニックと呼ばれる、ギヤなどを使ったより複雑な機構を再現することのできるレゴブロックを使ったり、マインドストームと呼ばれるパソコンなどを使うことでプログラミングし、モーターなどを使ってより高度な動きを生み出すこ

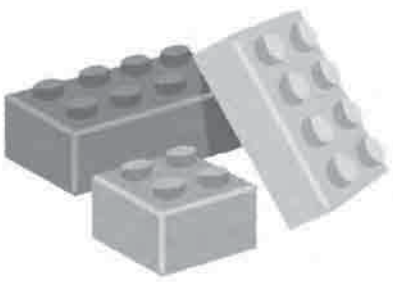
とのできるレゴブロックを使い、セットの説明書に従うのではなく、自分の作りたいものを作れるようになりました。レゴブロックは、何度も組み立てたりばらしたりすることができ、またパーツの色や種類が豊富で、自分が作りたいものを形にしやすいおもちゃでした。

しかし、いつも自分が思うようなものが作れるわけではないことを教えてくれたのが、工作です。自分には、金属やプラスチックを加工する技術はなかったので、何か作りたいものがあればすべて紙で作っていました。僕は車が好きなので、車を紙で作ろうと何度も試みたのですが、満足できるものをつくれた例がありません。これは、強度が弱い、曲面が表現しにくいなどの紙の弱点もありますが、自分の加工技術や精度が低かったというのが大きな原因の一つです。僕はこの時、厚紙だけではなく、金属やプラスチックも加工できるようにし、自分の加工技術や精度をもっと上げたいと考えました。

そのためには、加工のしかたを学ぶ必要があります。そこで、僕は技術の授業をしっかりと受けたいです。技術の授業の中でも、特に力を入れたいのは実技の時間です。普段は使うことのできない特殊な工具を使うことができたり、どのようにしたらきれいに加工できるか、どのようにしたらきちんと精度を出せるかなど、貴重な技術を自分のものにするチャンスです。

また、そのような技術が自分に身に付いたら、その技術を自分だけでなく、他の人の生活を便利にするために使いたいです。例えばリモコンを立てておける箱。一見簡単に作れそうですが、リモコンを取り出しやすいように工夫したり、もっと便利になるように小物を入れる箱をつけたりすると、ある程度の技術が必要になってくるでしょう。もし、そんなリモコン立てがあったら、誰かが何かを操作したい時に、リモコンが一つの決まった箱にまとまっているので、すぐに見つけ、取り出すことができます。また、小物入れとしても使えるので、部屋の中が多少片付きます。このように、一つのリモコン立てが、使う人の生活を便利にすることだってできるのです。このリモコン立てをもし僕が作ったら、大きく二つの喜びを感じると思います。一つが、「つくる喜び」そしてもう一つが、「人の役に立てた喜び」です。人の役に立つものとは、いわゆる実用性が高いもので、普段の生活に耐えることのできる強度など、ある程度の耐久性が求められます。これまで僕がやってきたレゴブロックや工作は、芸術系と呼ばれるもので、あまり人の役に立つことはありません。実用性の高いものをつくるというのは、とても難しいことです。しかし、だからこそ僕は、これから挑戦していきたいと思っています。

このように、僕は今、人の役に立ち、実用性が高いものをつくりたいと考えています。しかし、工作で学んだように、自分の思うような物が作れない時もあるかもしれません。もしそうでも、あきらめずに工夫をして、少しでも理想に近づけるように、ものを「つくって」いきたいです。この一つ一つの積み重ねがあってこその、「つくる喜び」だと、僕は思います。



# 他人の笑顔

世田谷区立喜多見中学校　三年
平山　佑

私は、技術・家庭科の授業やボランティア活動を通して、他人のために何かをする喜びを知りました。初めにそれを実感したのは、技術の時間で作ったペン立てです。授業内では終わらず、居残りをしてまで完成させたペン立てを家に持って帰ったら、今まで置き場所に困り、ついつい散乱してしまったペンが、きれいに一つの場所にまとまって、家族も喜んでくれました。

次にそれを実感したのは、技術の授業で作った本立てです。この作品は1・2年をまたにかけて作った大作で、設計から始め、ノコギリを使って切断し、やすりがけ、ニス塗りまでしました。そこまでした作品だけに、家に持って帰った時の実用性や、みんなからのほめ言葉などとてもうれしかったです。この本立ては今も、置き場所の困っていた本達の大切な置き場所になっています。

この作品を多くの人に知ってもらうためにパソコンで、作品紹介の広告を作り、多くの人に興味を持ってもらうために工夫をして作りました。

技術科の最後の作品として、プロックを作りました。はんだづけをして、金属板に部品を取り付け、プロックの核を作りました。部品を組み立て、コードをつないで完成させました。この作品のいい所は、パソコンで機能を作ることができることです。私は目覚まし時計がなるとき、自分が作った曲が流れるようにしました。このプロックは母親にとても喜ばれ、目覚まし時計の機能も朝に弱い私でも、気持ちよく起きられるとてもいい機能でした。

ボランティア活動では、古着古布回収をし、炎天下の中、古着古布を受け取りました。最初は、自分から古着古布を受け取ったり、次回の日程やポリ袋を渡すのに抵抗があったけど、最終的には、自分から声をかけ、積極的に行うことができました。古着古布を持って来た人達から受け取り、次回の予告とポリ袋を渡したときに、「ありがとう」と言われた時は、とても嬉しく、達成感や感動が込み上げてきました。ボランティア活動なのに、多少お菓子をもらえて、他人のために何かをすると何か見返りが来ることを知りました。一人では運ぶのが大変な時も、仲間と協力して多くの荷物を一気に運び、他人と協力して仕事をすることの効率の良さを知りました。

家庭科の授業でも、他人の笑顔を見ることの喜びを知りました。特にそれを実感したのは、エプロンを作ったときです。家庭科は苦手で、ハサミで布を切るのも大変なのに、ミシンや裁縫まで入るなんて聞いただけでもめまいがしそうだけど、心の帯を締め直して頑張りました。朝の居残りなども使い、何とか時間ぎりぎりで終わりました。本当に苦労した作品は、完成した時はとても嬉しく、皿洗いする時や料理をするときにとても役立ち、

家族にとても喜ばれました。ほかにも、調理実習や、ランチョンマット、絵本なども作り、多くの他人の笑顔を見ました。

このように私は、多くの作品を作り、多くの他人の笑顔を見ることによって、他人のために働く心、他人の笑顔を見る喜びを多く感じました。これからも他人と協力したり、他人のために働く心を養って、この世界が笑顔に包まれるようにしていきたいです。人の笑顔が世界を平和に、幸せにしていきます。

# 体験を生かす

中野区立第七中学校　三年
阿部優花

私は将来、看護師になって人の役に立ちたいと思っています。そのため中学二年生の職場体験の時、看護師の仕事を体験しました。

職場体験は三日間行われ、一日目は外来、二日目は療養病棟、三日目は一般病棟を訪問し、三日間ともに学ぶことがたくさんありました。一日目の外来では血圧を測る方法、受診方法などを学び難しかったです。でも、一つ一つ丁寧に行うのは、患者さんにとって大切な事だと分かり良かったです。二日目の療養病棟では多くが体が不自由で寝たきりの方だったので、直接接するなかで、その方たちの苦しさを感じ胸が痛みました。三日目の一般病棟では、二日目のように患者さんと触れ合いました。その時、患者さんが

「私は今、すごく幸せです。」

と教えてくれました。それは、きっとお医者さんや看護師さんのおかげだと思いました。私は、患者さんに幸せと言ってもらえるような看護師さんになりたいです。この職場体験では、自分の将来に対しての目標ができ、とても有意義でした。

さらに、私はボランティア活動を通して将来について考えました。このボランティア活動というのは、中野区で行なっている地域活動の一つです。私は小学校六年生、中学校一年生、二年生の夏休みにこのボランティア活動に参加しました。ボランティア活動は福祉、保育園や外国語教室など様々で、初めて一覧表を見た時は少し迷ってしまいました。私は、この中から保育園に決めました。保育園では幼児の相手をしたり、掃除をするなどが活動内容です。

小学校六年生の時は、何をするにも初めてだったのですが、保育士さんが一つ一つ丁寧に教えてくれました。そのおかげで、幼児に笑顔が増えてとてもうれしかったです。

次の中学一年生の時は、四日間体験しました。一日目には少し慣れない事が多かったですが、二日目には一日目の体験を生かして活動することができました。三日目はある幼児にエプロンをかけたら、

「ありがとう。」

と大きな声で言われました。私はこの言葉をこれからも大切にしていきたいと思いました。四日目は最終日だったので、この四日間の中で一番良かったと思える日にしようと思い活

動に取り組みました。この日は夏休みの真最中なので、幼児たちはプールに入って楽しそうに遊んでいました。その後の着替えや後片付けなどは活動の一つとしてやりました。プールの片付けはあまりやったことがないので、片付けるのに時間がかかってしまいました。それでも、最後までやることができて良かったです。次に去年のボランティアでは、一昨年よりも日数が少なかったのですが、最後だと思い、おもいっきり楽しんでやりました。

　このように、保育園のボランティアでは色々な体験をしました。その後、保育士さんたちから、保育園の事や保育園について教えてもらいました。一つめは保育方針についてです。私が去年訪れた保育園では、自然にじかに触れて遊ぶことや、しなやかで丈夫なからだを作ることなど約十個ほどの方針があるそうです。中には、共育て・共育ちを大切にしていくというものがあり、ここで友達を大切にする心を学ぶのだと思いました。また、方針をたくさん立てることで心も体も大きく成長するなと思いました。二つめは、子供に分かってもらうためには、子供と同じ目線になり、話すことが重要だということです。大人と子供では、見えている範囲が大きく違い、子供の気持ちになってみると違いがよく分かると教えてもらいました。また、子供たちにこれはやっていけない事を、しっかり理解してもらうために色々な工夫をしていると言っていました。たとえば、普通に「走らない」と書くのではなく、色を使って興味をひいたり、キャラクターを書いてみたりしていることです。

　私は保育士さんたちの工夫により、子供たちはルールを守る心や、物を大切にする心などを学べるのだなと思いました。また、運動会などの行事では一人一人がけん命に取り組み、協力することの大切さを学べて良い機会だと思いました。このボランティア活動で本当にたくさんのことが学べてうれしかったです。

　その後、子供の成長について中学校家庭分野の授業で詳しく学びました。例えば、誕生から一歳までの子供を乳児期ということや、おもちゃの選び方、与え方、また遊び方の変化などです。私が最も関心をもったのは、遊びによって子供につく能力のことです。私がボランティアに行った保育園では、ボール遊びやお店屋さんごっこなどのごっこ遊び、パズルなど授業で教わったもの全てが関係していました。私は、ボランティアをしたおかげで授業にも関心をもてたり、またテストでは自分に自信がついたりしました。今の授業で行なっている幼児のおもちゃづくりでも、以前のボランティア活動で教わったことや学んだことを生かして良い作品を作りたいです。また、ボランティア活動を生かす場所はほかにもあると思います。技術分野では設計から製作まで行い、創造力がとても大切だと思いました。一つの事に取り組む時に必要となる、集中力も技術分野の授業で学び身につけることができると思います。しかし、創造力や集中力よりも工夫する力が一番大切だと思います。これらの能力は幼い頃に、少しずつつ

くられていくのだなと考えました。この能力は、生きていくために必要なものだと思うので大切にしていきたいです。

私は将来について、看護師や保育士は良い職業だと思ったのでぜひ夢にしてみたいです。そのためにも、一回の授業を大切にし自分自身のために日々努力していきたいです。

# 言葉のない命

中野区立第七中学校　三年
伊藤瑞喜

私にはなりたい、いや、絶対になろうと思っている職業があります。それは、獣医です。獣医になりたいと思ったのは小学校五・六年生の頃でした。獣医ドリトルという俳優の小栗旬さんと井上真央さんが出演していた、獣医を題材にしていたドラマを見て、獣医ってかっこいい、こんな風に動物の命を助けられたら良いなと思ったのがきっかけです。

技術分野での生物育成の授業で、ビデオを見ました。それは家畜の管理の内容でした。そこには家畜の健康を管理している獣医さんが出ていました。食用になったりする経済動物の体調管理の難しさと、他の動物からの害があったりするということをビデオを見て学びました。そして動物を飼育している農家の方には休みが無く大変だということも分かりました。

私たち人間には言葉という便利なものがあり、怪我や病気をして、病院に行けば自分で痛いところなどを言えますが、動物たちは痛くても言えない、助けてほしくても鳴くことしかできない、だから人間が気づいてあげないといけないことが多くあります。その動物の声なき声を分かろうとすることが獣医になったらとても大切なものではないのかなと思います。

動物は、人々に癒しと笑顔をくれます。そして小さい子やお年寄りまで全ての人に愛されているものだと思います。お年寄りの方には癒しのものとして、小さい子には自分と違う動物の存在を知るために、児童期や中学・高校生のときには責任をもって育てることの重要さなどを教えてくれるのが動物ではないかとも思いました。

獣医は簡単になれる職業ではありません。もしかしたらどの職業よりもなるのが難しいと思っています。なぜかというと、一つ一つの臓器の大きさが小さいということも、もちろんですが、なによりも一つの診断ミスで手術をしていくと人間より小さい体には人間以上の体力消耗と、体への負担がかかり、再手術がすぐに出来るわけではないのがほとんどだと思います。そして獣医の場合はまだ生きられる命を奪わなければいけないときがくる場合があります。そう考えると私はなれるのか心配になるときが多々あります。しかし、そんなとき私は自分が獣医になって一匹を手術し助けられなかったときと、もう安楽死させるしか選択肢がなくなったとき、どちらがより悔しいと思うかを考えます。皆さんだったらどうですか。もし獣医になったときにこの二つの考えが浮び、それに直面したら。私だったら、安楽死も一つの手段としてあっ

ても良いのではないかと思います。
　そこで家畜の話に戻ります。家畜は、怪我や乳の出が悪くなり効率が悪くなると、処分されてしまうと聞いたことがあります。だから、家畜の管理をしている獣医さんは、飼っている農家の方にとっても大切な存在だなと思いました。
　私は獣医という職業はとても難しいものだと思います。動物を飼っている人の期待を背負っている仕事でもあるからです。
　私はまだ金魚しか飼ったことがないので、家族同然の動物を失う気持ちを体験したことがありません。ですから、一度、獣医さんにお世話になって受診する身を経験し、獣医になったら患者さんの気持ちになって治療をしたいと思いました。
　技術分野の生物育成のところを見ても、色々と環境や、習性が合わさって、動物の過ごしやすさが変わるということが一番生物育成を学んで分かったことです。
　将来は、動物の声なき声をしっかり聞けてどの人よりも動物のことを考えた、考えられる獣医になり、そして生物育成で分かったことや、動物の習性などを生かして、頼れる、いや、頼られるような獣医になりたいなと、生物育成を学習していて思いました。
　人一倍努力して、自分の夢を叶えられたら良いなと思います。

# 職場体験を通して学んだこと

北区立赤羽岩淵中学校　三年
**遠藤七瀬**

「今日から中学生の先生が一週間来てくれるから、ちゃんと挨拶しましょうね。」
すると、「はぁい。」と子供たちの声。
「では先生、入ってきてください。」みんなのきらきらした視線を浴び、ドキドキしながら私は教室に入る。
　私は職場体験で幼稚園に行った。幼稚園の先生になりたかった訳ではないのだが、小さな子供と接する機会は、人生でこの先あまりないだろうなと思ったから幼稚園を選んだのだ。まあ、こんな選び方も悪くはないと思う。
　幼稚園の先生というのは思ったよりも重労働で、仕事は朝早くから始まる。まずは園庭の掃除だ。園児たちが使うものだから衛生に気をつけなければならないので、みんなきれいにしなければいけない。
「ほうきで落ち葉を掃いて。」「雑巾で滑り台をふいて。」「砂場の砂をシャベルで掘り返して。」幼稚園の先生っておっとりしているイメージだったが、意外とサバサバ、キビキビしている。私はせっせと先生に言われた仕事をこなしていく。まだ冬だったので、手がかじかんで真っ赤だ。手に白くなった息を吹きかけながら、「うぅ。寒い…。」と思わずつぶやい

てしまう。

そのあとは、いよいよ園児たちを乗せたバスが到着する。子供たちは登園してくるなり、キョトンとして、だれ…？というふうに私をじーっと見つめてくる。「今日から先生なんだ、よろしくね！」「うーん？」それでもよく分からないという顔だ。みんなと仲良くやっていけるかなぁ。まだまだ不安はいっぱいだ。

その後は授業を見学。歌を歌ったり、漢字を勉強したり。英語の授業に関してはびっくりだ。先生がカブの写真を見せて、「これは英語で何ですか。」と聞くと、みんな声をそろえて「ホワイトラディッシュ！」と答えた。ちょっと前、私が中学の英語の授業で習ったのと同じ内容を幼稚園児が習っていた…。

私は授業中はずっと立っていなければならないので、腰は痛くなるし、筋肉痛にもなる。それを毎日あたりまえのようにやっている先生は本当にすごいと思う。

やがてお互いの緊張も解け、休み時間は子供たちがかけ寄ってきて、「せんせー、あそぼー！」「かくれんぼー！」「おにごっこと砂あそびー！」と次から次へとリクエストしてきた。あぁ、分身できたら全部遊べるのにな。そんなことを考えながら「いっぺんに全部できないから…まずはかくれんぼからしよっか。」と言う。すると「えー。おにごっこがいいー。」とふてくされる子、「やったー。」と飛び上がって喜ぶ子や、無言で抱きついてくる子。本当にみんなかわいい。

そしてお昼の時間には、「今日ね、お弁当全部食べたんだよ！」そう言って空になったお弁当箱を見せにくる。「すごいじゃん。ママ、喜んでくれるね。」そう言ってよしよしと頭をなでてあげると、顔をくしゃっとして笑う。あぁ、癒される。どんなに立ちっぱなしで疲れても、この笑顔とかわいさが全てを吹き飛ばしてくれた。仕事のやりがいは、園児たち、みんなの笑顔だ。

これからみんなどんな大人になっていくのだろう。元気で、優しい大人になるかな。私の事、もしかしたら覚えててくれたりするかな。そんな事を考えた。自分たちのことを「先生」って呼んで慕ってくれた子供たちの成長がとっても楽しみだ。

一週間も早いものでいよいよ最終日。手紙を書いてくれたり、折り紙で鶴や手裏剣を作ってプレゼントしてくれたり。みんなの優しさが嬉しいのと、お別れをしたくないのとで、目頭が熱くなった。

「この一週間、たくさんご迷惑をかけてしまったと思いますが、子供たちの力を肌で感じることができました。ありがとうございました。」と、お世話になった先生方にお礼を言った。そしたら、「実習生の人よりも一生懸命働いてくれました。幼稚園の先生になりたかったら、いつでもいらっしゃい。」と言っていただいた。飛び上がる程嬉しかった。この一週間頑張って良かったな、と改めて思った。

私はこの職場体験を通して、外から見たら分からない仕事の大変さや苦労を沢山学ぶことができた。この貴重な経験は大人になっても忘れないだろう。

# 頑張る人に夢を与えたい

葛飾区立堀切中学校　三年
加藤　太一

僕はまだ十四年半しか生きていません。世の中にどんな仕事がどれくらいあって、本当に自分に合った職業は何なのか、まだ巡り合えていない可能性は大いにあると思います。

僕は小さいころから、将来の自分の進む職業について、冷暖房が効いたきれいなオフィスでのデスクワークという、とても漠然としたイメージがありました。これは自分の父親の仕事について、毎日出勤するその姿を見続けてきた、ある種の「あこがれ」のような気持ちがあり、一つの身近な目標でもあるからです。

そんな中、昨年、職場体験でハンバーガーショップに通い、一週間ではありましたが、実際にお店で働く機会がありました。今まで思い描いていた職業、職場の様子とは全く違う職場でした。正直なところ、実際に体験するまでは、ハンバーガーショップの仕事ならば学生のアルバイトなどもよく見かける仕事なので、きっとすぐに覚えられるだろうと安易な考えをもっていました。ところがお店での仕事の話を聞き、実際に職場の仕事を体験してみると、注意しなければならないこと、覚えなければならないこと、同じ作業でも効率良く進めるための工夫など、学校の学習以上と思えるくらい勉強することがたくさんあって驚きました。家に帰ってその話をしたところ、僕の父親が「人生はずっと勉強の連続で、学校の勉強だけが勉強ではない」ということを話してくれました。

この職場体験で、仕事について色々と考えることができました。オフィスだけが職場ではない。デスクワークだけが仕事ではない。今まで頭ではわかっていても、今ひとつ自分の腹に落ちてないというか、出来上がった職業へのイメージから離れられないでいた自分が、ようやく本当の意味で色々な職業があるのだということを理解できたのだと思います。

この職場体験を通じて、もう一つ大きなものを得ることができました。それはお客様の笑顔です。「ありがとう」というひと言をもらううれしさです。

ハンバーガーショップに来るお客様は、みんな空腹で、美味しいハンバーガーを食べたくて訪れます。私たちお店で働く側のスタッフは、いかに手早く、いかに美味しく、いかに衛生的に商品をお渡しできるか、それが、気持ち良くお客様に対応できるかにつながります。そして気持ち良い対応ができると、たまに、本当にまれの事ですが、お客様からありがとうと言って貰えます。とてもうれしそうな笑顔を下さいます。そうしたお客様が喜ぶ姿が、また頑張ろうと思う力に変わることを知りました。

実は僕は最近になって興味のある職業がでてきました。それはゲームクリエーターという仕事です。そして僕が作りたいゲームというのは、繰り返しそのゲームにチャレンジした人が強くなれる、お金でアイテムを買えば強くなれるということではなく、頑張った人こそが強くなれるゲームです。ま

じめに努力した人が報われる、そんなゲームが本来のゲームだと思うのです。お金を出せば強くなれる、夢がお金で買えるゲームは本来のゲームではないと思うのです。

今、僕たちは高校受験を控えた受験生だという現実があります。僕は自分の将来について、まだまだ漠然としたところが多く、とにかく将来自分が進む道、選ぶ道の選択肢を少しでも広くしておくために、頑張って勉強しています。しかし友達の中には、そんな僕の勉強について批判的な意見の人もいます。もちろんごく一部の人ではありますが、そんなに頑張ってどうするの、何が楽しいのという人もいます。

僕は勉強もゲームも、その他のことも、頑張った人が報われる、夢は努力した人に与えられるべきだと思っています。しかし現実はそれほど甘くは無いということも段々とわかってきたような気がしています。だからこそゲームのような娯楽くらいは、努力した人に確実に夢が与えられる、そんなゲームを創っていくことができるクリエーターは素晴らしい職業だと思います。

少し話がそれますが、世界には貧困に苦しむ子どもたちがたくさんいます。満足に食事も摂れず、勉強する努力さえできずにいるのです。

日本で僕はずっと勉強してきて、その勉強を生かして職業に就きお金を稼ぐことができます。そのお金で、また自分の子どもが勉強することができます。でも貧困に苦しむ国や地域の子どもたちは違うのです。彼らは勉強する機会に恵まれず、その結果、望む職業にも就けなくて、その子どもたちも貧困から脱しきれないのです。でも彼らだって、生きるために頑張っているのは間違いないと思うのです。でもなかなかその頑張りが報われないのです。広い意味で捉えるならば、僕はこういう頑張りに対しても、何か夢をもって、努力すれば叶えていけるようにならなければならないと思うのです。

将来、自分がどんな職業に就くかはまだわかりません。ゲームクリエーターになるかどうかもわかりません。でも、どんな職業に就くにしても、努力した人に夢を与えられる、お客様がうれしいと思える、そんな職業に就きたいと思います。

# 体験を未来に繋げて

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
井上明香

人はなぜ働くのだろう。

私は今から約三ヶ月前こんな疑問を抱きました。その時の私の出した答えは、「働くことは生活するために必要なお金を稼ぐこと。」でも、今は、この問いに対する答えは変わりました。なぜなら、今から約二ヶ月前に、五日間にわたり、社会の一員として職場体験を行ったからです。

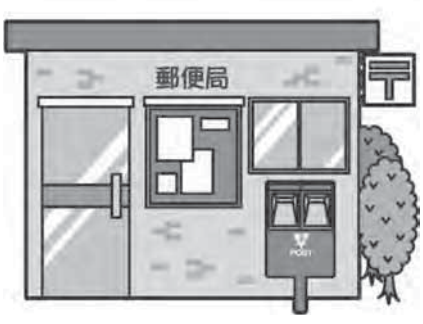
職場体験一日目、私は、学校で奉仕活動をしました。はっきり言って奉仕活動として学校の清掃をするのは、大変でした。しかし、作業をしている最中、近くを通った先生が、

「綺麗にしてくれて、ありがとう。」と感謝してくださいました。私は、素直に感謝してくださる人がいるんだと思い、奉仕活動をとても楽しんで行うことが出来ました。

二日目、三日目は、学校ではなく、郵便局での職場体験でした。実際、朝、職場に行ってみると、職場の方がてきぱき働いていました。その時私は、「自分もこのように働くんだ」というわくわく感の中の期待と、「職場の方が毎日こんな早くから働いてくださっていたんだ」という尊敬の気持ちが混ざっていたと思います。郵便局での二日間は忙しくて大変でしたが、とても楽しい充実した二日間だったのではないかと思います。郵便局での郵便物の仕分けと消印を押す作業では、仕事をした分だけ目の前から郵便物が無くなっていき、とてもやりがいがありました。また、郵便局での作業は、「私達がしないとお客様に届かないんだ。」と思うと、わくわくし、「働く」ということに対する喜びを感じることが出来ました。

そして、最後の二日間は、美術館での職場体験でした。美術館で一番驚いたのは、お客様をお迎えする前にたくさんの仕事をしていたことです。管理人さんと館内を歩いて一日の美術館の準備をすると意外と大変でした。館内の電気をつけるところから始まり、作品に傷がつかないように湿度や温度の調整まで行いました。また、昼間には、学芸員さんの仕事として展覧会の準備も行いました。この二日間も、二日目、三日目とは違う充実した二日間だったのではないかと思います。いつも客として利用している美術館。でも、二日間だけ客ではなく、お客様をお迎えする立場でした。そうすると、美術館は支えてくださる人がたくさんいるから成り立っていて、その人々に感謝しなければならないと思いました。また、「一人で作業していても大変で、まわりの人がいるから働けるんだ」と協力の大切さも学べたと思います。

私は、この社会の一員として生活した五日間で、主に三つのことを学べたと思います。一つめは、働くことの喜びです。働いたら「感謝される自分がいて、感謝してくれる人がいる」ということを知ることが出来、働くことの喜びとともに楽しみも知ることが出来ました。二つめは、毎日働いてくださる人への感謝の気持ちです。「今もどこかで誰かが働いてくれて、成り立っている。」と思うと、「すごくありがたいことだし、あたりまえのことではないんだ。」と思うことが出来ます。三つめは、働くまたは何かをする上での協力の大切さです。一人で何かをやろうとしても大きなことは出来ないんだと知ることが出来ました。




私は、職場体験を通じて学んだ三つのことから、「人はなぜ働くのだろう。」という問いに対する答えを改めて出すことが出来たと思います。今は、「働くことは社会に貢献すること」だと思います。今の段階では、社会に貢献することは出来ないと思うので、練習の為に、与えられた課題を確実に熟(こな)し、将来、希望の職種に就けるように努力していきたいです。

# 見えない『バックヤード』

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
齋藤　舞

『バックヤード』とは、つまり裏方のことである。では、人々を時に驚かせ、時に感動させる、博物館。それを支える、バックヤードとはなんだろう。

私は、美術館や博物館が好きで、よく両親に連れていってもらう。だからこそ、このことには、とても興味があった。そして、職場体験先に、「明治大学博物館」を希望した。嬉しいことに希望が通り、七月七日から九日までの三日間、体験先にお世話になることになった。

期待と緊張感で迎えた初日。朝の通勤ラッシュ時の電車は、予想以上に大変で、押しつぶされそうになった。無事に、御茶ノ水駅に到着でき、ほっとした。

職場の雰囲気は、とても和やかだったが、緊張はほぐれず、挨拶も声が裏返ってしまい、ままならない状態だった。

館内の施設や展示を、一通り見学、ガイダンスを受け、昼食の時間になった。一緒に体験をする友達と、話をしながら、お弁当を食べていた。すると、

「お疲れ様。午後からは、力仕事が始まるけど、頑張ってね。」

と、職場の方が、お菓子の差し入れをしてくださった。その後も、職場の方々と、部活の話などして、盛り上がった。緊張はもう、ほぐれていた。差し入れのお菓子は、とても美味しかったし、その心づかいが嬉しかった。

午後は、埴輪を洗う作業から始まった。大きな収蔵庫から、何百年何千年も前の土地から出土した埴輪の破片を、慎重に運び出す。そして、その破片一つ一つを丁寧にブラシで洗っていく。地道な作業だったが、泥まみれだった破片が、自分の手できれいになる。とても、やりがいを感じた。さらに、洗いを加え、見やすくなった縄目などの跡から、その当時の環境や、どんな形の埴輪のどの部分かまでも推測するのだ。珍しい物もあったりして、面白かった。

次の作業は、職員の方から聞かされていた、「力仕事」、収蔵庫の片付けだ。収蔵庫は、考古・刑事・商品の三つの分野ごとに分かれていて、一階、二階に広がるとても大きな倉庫だ。まず、実験や研究で使用した、土器などを収蔵庫にしまう作業から。土器がたくさん入った箱を台車に積み、運んで、棚に収納する。作業自体はシンプルだが、土器がとにかく重いのだ。そして、貴重な資料を運んでいる、というプレッシャーもあり、不安だったが、職場の方が「上手いね。」と褒めてくださった。そのお陰か、もっと仕事をつづけていきたい気持ちが沸いてきた。

忙しかった一日目も終わり、「さあ、帰ろう。」としていると、職員の方々が

「明日も頑張ってね。」

と声をかけてくださった。

「はい！ありがとうございます。」

自然に元気な返事を返すことができた。今日一日の、成長を

実感できた。

博物館に対する、私の最初のイメージは、展示案内や解説をしたり…という、落ち着いた印象のものだった。しかし、それは私達が見える表面上の一部である。裏側、すなわちバックヤードでは、資料の洗浄から始まり、保存・研究…と職員の方々が、様々な作業を積み重ねているのだ。つまり、このバックヤードが博物館の大黒柱ということだ。更に、『バックヤード』は、このような施設のみならず、全てにおいて大切なんだと三日間を通じて学ぶことができた。例えば、ミュージカルなどの舞台でも、裏方がいなくては成功はおぼつかない。もちろん、裏方は人々からは見えないが、裏方（バックヤード）がしっかりしている程、舞台（表）は輝くのだと思う。

さらには、コミュニケーションの重要さを改めて考えさせられた。それは、ただの会話ではない。社会における、コミュニケーションには職場の仲間達の予定や役割を、把握しておくことも含まれている。特に、博物館ではなおさらだ。職員には、それぞれ専門分野があるからだ。また、忙しそうにしていたらサポートしたり、と助け合いもでき、良い人間関係が築いていける。

これら二つのことは、私達の学校生活でも言えることだと思う。

三日間という短い期間だったが、貴重な体験ばかりで、毎日が充実していた。「働く」ということについて、全てを理解するのは無理かもしれない。でも、その何パーセントかは理解できた気がする。まず、職場は、自分を育て成長させる生道場だということ。将来、働いていく上で、プレッシャー、失敗の繰り返しかもしれない。しかし、それが自分を成長させていくのだと思う。そして、働くことで、それが誰かの役に立つ。そう思うと、仕事の中に、自分でやりがいを感じられる。これから、私はボランティアなどに積極的に参加したいと思っている。ボランティアで「働く」ことで、もっと経験をしたいからだ。

もう一つ、思っていることがある。両親への感謝だ。中学生になってから、素直になれず、反抗ばかりしていた。しかし、この職場体験で、働くことの大変さも分かった。今、こうして生活をしていけるのも、両親のお陰なのだ。でも、ただの「ありがとう。」では、伝えきれないと思う。最近、よく母の手伝いをしている。失敗しても怒られても、それを自分の貯金、蓄えにするのだ。そして、手伝いなどをすることで、日頃の感謝を伝えていきたい。

# 感謝する

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
廣瀬由梨佳

私は、今回の職場体験で、働くときに一番大切なことは「感謝の気持ち」を忘れないことだと思いました。なぜなら、私が生活できているのは、たくさんの人が働いているからだと気づいたからです。

私が今回の職場体験で行くことになっていた場所は「牧野記念庭園」でした。そこには牧野富太郎博士が植えたとされるめずらしい植物などがあり、誰でも自由に入ってそれらを見ることができます。このような所でどんな仕事をするのか具体的に分からなかったり、しっかり返事をできるか、敬語を使えるかなど不安がたくさんあったりして、職場体験初日はとても緊張しました。

職場体験初日は、まず、牧野記念庭園についてよく知るために、牧野富太郎博士についてのビデオを見ました。その後、牧野記念庭園を周り、構造を理解してから、牧野記念庭園のマップを作成しました。午前中の仕事はこれで終わりでした。午後は受付をしました。来園なさる方にあいさつをして、名前を書いてもらうよう一言添えることが受付の仕事内容でした。緊張するとお礼を言うのを忘れてしまったり、顔がこわばってしまったりして受付一つでもそれをこなすのは大変だと思いました。一日目は言われたことをこなすので精いっぱいでした。積極的に行動しようと思ってもなかなかできず、働くことの難しさを感じました。

二日目は園内の清掃をしました。園内には砂利がまかれているため、熊手という掃除道具を使用して、砂利をはかないように落ち葉をはきました。とても難しく、なかなか上手く落ち葉をはけませんでしたが、今日こそ積極的に仕事をしようと、さまざまな所をすみずみまで掃除しました。とても蒸し暑かったので、思っていた以上に大変でした。しかし、来園なさっている方々がうれしそうに園内を周っているのを見て、仕事を頑張った甲斐があったと思い、やる気が出ました。このとき、仕事はお客様を喜ばせるために懸命に取り組むものであり、人々は働くことによって互いに助け合っていると強く感じました。午後には、あじさいの挿し木体験やいぼ結び体験をさせていただき、事業所の方には感謝の気持ちでいっぱいでした。

その日、帰宅してから「働く」ということについて考えてみました。働くことは、もちろん自分のためでもあります。しかし、自分の身の回りの物、電気、エアコン、パソコン、紙、文房具など、私達の生活を豊かにしているものが当たり前のようにこの場にあるのは、働いている人がたくさんいるからだと思いました。つまり、働いている人は、皆、どこかで私の生活を支えてくれていると思いました。だから、明日の最終日

の職場体験では、来園なさる方に今まで以上に感謝の気持ちを持ち、仕事をしたいと思いました。

そして三日目。最終日だったので、とても難しい仕事を任されました。それは、牧野富太郎博士の写真を私達が写真にとり、パソコンに保存する仕事でした。写真は光を反射しやすいため、それを写真にとるのは難しく、電灯の位置を変えたり、電灯にカバーをかぶせたりと試行錯誤をくり返した後、やっときれいな写真をとることができました。このとき、仕事をする上で困難なことがあってもあきらめずに仕事を続けることが大切だと感じました。午後は受付をしました。来園なさる方は、どこかで私の生活を支えてくださっていると考え、感謝の気持ちを持って接客しました。すると、自然と笑顔で、スムーズに接客することができ、来園なさる方に喜んでもらえてとてもうれしかったです。

この三日間の職場体験はとても充実したものになったと思います。仕事をする上では誰にでも感謝の気持ちを持つことが大切であり、それは行動に表れてくると思いました。だから、将来仕事をするときには感謝の気持ちを忘れずに仕事に取り組みたいです。また、普段の生活から、感謝する心を持つことは大切だと思ったので、今後の生活に生かしていきたいです。

そして、今回私達の職場体験のためにさまざまな準備をしてくださった事業所の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。だから、私が社会人となったら、働くことによってどこかで恩返ししたいです。

# いのちをあずかる

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
細田夏花

この夏、私の通う中学校では、学習の一環として職場体験が行われた。実際に職場を訪問して仕事を体験させてもらうという内容にはじめは驚き、とまどった。そんな職場体験で私が訪問したのは、家の近くの保育園だ。私はそこで、保育士という仕事を体験させてもらった。

私自身、保育園に通っていた経験から保育士の仕事についてのイメージが少しあり、また、先生方の仕事にも興味があった。しかし、兄弟がいない上に年下の子供達とのコミュニケーションが苦手な私には、うまく話せるだろうか、仲良くできるだろうかと不安になる職種であった。

職場体験に向けて、訪問する職場のことを調べたり、事前訪問をしたりと様々な準備も進めた。しかし、そんな準備の裏には、先生方や保護者の方々、それに職場の方々の協力があった。だからその分、しっかりと学ぼうという気持ちで職場体験に臨んだ。また、五日間という長い期間を有意義なものにしようと思った。

そして職場体験初日。緊張の中、様子をうかがいつつ、ガチャリと保育園のドアを開けると、中では、出勤前に急いで子供をあずけるお父さん、お母さんや、大勢の園児達の体調確

認をする先生達が忙しく廊下を行きかっていた。そんな中で、なかなか挨拶ができないでいた私に一人の先生が気付いて、「おはようございます。」と優しく声をかけてくれた。この時、不安だった気持ちが少しやわらいだが、本当は自分から勇気を出して動かなければいけないということは、わかっていた。でも実行に移すことができなかったのだ。

こうしてスタートした職場体験。今回、私がお世話になった保育園では、五日間の中で色々な年齢のクラスを担当させていただけた。どのクラスでも、園児達はみんな活発で人懐っこく、不安だったことが嘘のように話しをしたり、一緒に遊んだりと、たくさん交流することができた。これは、特に自分が意識してできたことではなく、園児達に助けられながらも自然とできたことだと思う。

他にも、保育園の行事で使われる飾りものの製作を手伝っている時や、園児達がお昼寝をしている間も働く先生の姿を見て、園児達が保育園を楽しむために、先生がこんなにも工夫をこらして働いているんだということに気付かされることもあった。

様々なクラスを担当させてもらうことによって、クラスそれぞれに年齢に応じた成長段階があり、手を貸していいこと、助言をして園児自身にさせた方がいいこと、何も言わず、手も貸さず、様子を見守った方がいいことなど、関わり方にも違いがあることを知った。そんな中で、五日間を通して一番印象深かったことは、0歳児のクラスを担当したことだ。

0歳児では、身のまわりのことを、全て先生が行う。つまり、着替えも食事もトイレもということだ。また、身体もとても小さく、自分の気持ちを言葉にすることができない。そのため、泣いたり笑ったりする声や表情で感情を読み取るしかないということになる。そんな0歳児を抱っこしていると、「いのち」をそのまま抱えているようで手が震えると共に、自分の責任の重さをずっしりと感じた。このことは、0歳児クラスに限らず、他の年齢のクラスにもいえることだが、0歳児クラスでは、特にこのことを強く感じたのだ。

五日間という、長いような短いような、でも終わってみるとあっという間の職場体験だったが、その一日一日がとても濃いもので、本当にたくさんのことを学び、感じることができた。

はじめは、職場体験の意図を「実際に体験することで、『働くこと』について知る」ことだと思っていた。しかし、職場体験を終えた今、自分は、一つの『働く意味』を発見できたと思う。それは、0歳児クラスで、いのちのおもみを感じた体験から得たものであり、「働くということは、いのちを支える源である」ということだ。どんな仕事でも先を想像してみると、生まれたいのちを育て、守り、支え合い生きていくことにつながるものがあると思う。

こうして、多くのことを学び得た職場体験。これからも、様々な経験を通して、たくさんの職業を知っていくことにな

るだろう。その中で、私は、たくさんの発見をしていく必要があると思う。また、そうすることで、並べられたたくさんの発見を土台に、より深く仕事について学ぶことができると思う。今回の発見を第一歩として、たくさん成長していきたい。

# 心の強さ

東京都立大泉高等学校附属中学校　二年
山田　才

人に見られていない時でも、本気でやるべきことをやれる人はどのくらいいるだろうか。どんな時でも自分の力を最大限出せる人はきっと心が強いと思う。私はまだそんな人間ではない。人が見ていればがんばれるけど、いなくなった途端ちょっとだらけてしまう、そういう心の弱い人間だ。けれど、職場体験をきっかけに、私も心の強い人間になりたいという目標をもつことができた。今までは他の人もだらけてしまうから大丈夫、と思ってきていたが、そういう甘えた心から卒業したいと思う、いいきっかけになった。

私は職場体験でスーパーマーケットに行かせていただいた。スーパーの仕事といえば、客目線で見ると、接客をする仕事のことが思い浮かぶが、本当に支えているのは、多くの裏側で行われる仕事である。私が最初にやらせていただいたのは、パンの袋詰め、惣菜への値段のはりつけ、青果の商品化など、少し地味で単調な作業だった。大変な作業でお客様に見てもらえるような仕事ではない。でもその時、副店長さんが私に教えてくださった。どんなに小さな仕事でも、どんなに単調な仕事でも、それは誰かの役に立っていて、青果のパック詰めだって大変だけど、お客様に新鮮な野菜を届ける事につながっているんだと。そう言われて、私は自分のやっているその仕事も、だんだん楽しく、そして好きになっていった。例え誰にも見られていなくても、人の役に立ってこんなに気持ちのいいことなんだと思った。私は大ざっぱな性格で、こういう作業は苦手だ。だけど、これでも人の役に立っていると思うとやる気になれた自分、つまり、視点を変えるだけでやる気になれた自分に、自分でも驚いていた。他の人にとっては、なんだそんなことで、と感じる小さなきっかけかもしれない。けれど、私にとっては十分すぎる大きなきっかけだった。

私は中学生。私にとっても中学校生活で大きくしめるのは、部活、そして「定期テスト」だ。定期テストでは、それまでの授業を真剣にうけることはもちろん大切だが、それよりも大切になるのは、テスト前一週間、二週間の勉強だろう。別に勉強することが人の役に立っているかは分からない。しかし、私が伝えたいのは、人の役に立つか、ということではなく、視点を変えることでどれだけ本気で取り組めるのか、ということだ。私は別に勉強することが嫌いなのではない。しかし、見られていないとだらけてしまうのだ。私はこういう時、マイナス思考をプラス思考に変えてみることが大切だと

思う。つまり、私は勉強が好きで、見られていればできる、ということなのだ。だから、図書館で勉強してみたり、家族のいるリビングで勉強してみたりすることが、私には必要なのではないかと思った。職場体験が終わってから、私はまだ、定期テストを迎えていない。だから、自分で自分を分析した結果がどれだけ正しいかどうかは分からない。けれど、自分の長所と短所を認め、視点を変え、それらを自分に生かしていけるよう努力していれば、いつか心の強い人間になれるのではないかと思った。

　働く時は自分に向いていない仕事もやらなくてはならない。自分の得意なことをする時、モチベーションが上がるのは当然だろう。一方で、自分に向いていないことをやろうとする時は、誰にも見られていない時と同様、だらけやすくなりがちだ。だからこそ私は、自分に向いていない事をやろうとした時にこそ、その人の本当の力が発揮されると思う。どんなに辛い仕事でも、それを楽しみに変えられる視点の切りかえ方、最後までやり抜くという強い精神、そして、それを好きだと思える気持ちさえあれば、私たちは何だって乗り越えられると思う。また、去年、昨日、一秒前できなかったことも、今ならできるかもしれない。そういう心の切りかえも私は大事だと思う。しかし、だからといって過去を忘れろ、というわけではない。その過去を認めて自分の一部とした上で、前へ進んでいくのだ。止まっていて、今までと同じことを繰り返していては、何も変わらないし、何も始まらない。もし、今の時代にちょっとでも理不尽を感じ、それを変えていきたいと思うのであれば、自分から前へ進んでいかなくてはならない。そういう事をしていくのが、私たち、若い世代だと思う。新しい事をやろうとすれば、きっとどこかで非難される。けれど、非難してくるのは、きっと自分から動いていけない人だと思う。そういう人たちを、あっと驚かせ、あいつならやってくれるかもしれない、そう期待してもらえるような人になりたいと思う。そのためにはまず、様々なことに興味を持ち、様々なことを体験していきたい。そしてその中で、心の強さをみがいていき、人を、チームを、日本を、世界をリードしていける人になりたいと思う。

高等学校の部　最優秀賞

# モノづくりの心を受け継ぐ

東京都立農産高等学校　二年
加藤幸乃

七十八歳になる私の祖父は、六十三年間モノづくり一筋に情熱を注いできました。祖父の仕事はプラスチックの原料を、押し出し機と呼ばれる高温の機械を使って着色し、ボールペンなどに使われるプラスチックを製造することでした。私は祖父の働く姿が大好きで、よく工場で手伝いをしていました。

祖父は普段温厚な人ですが、ひとたび工場に入ると厳しい顔つきに変わり、鋭い目つきで製品の着色具合を見きわめます。またプラスチックは、機械の温度や水温により色や堅さに影響が出るため、祖父は作業をしながら常に機械から出る微妙な音の変化に耳を傾け、温度や水温の調整をしていました。出来上がったプラスチックは二十五キロずつ袋に詰め、肩に担いで運びます。そんな祖父の体は、いつも汗を染め粉で真っ黒でした。長年培った技術は、他社には着色できない難しい仕事もこなすほどでした。より良い製品を作ろうと、毎日懸命に働く祖父が私にはとても誇らしく、あこがれでもありました。

また祖父は、仕事で使う道具や機械をとても大切にしていました。祖父が使う機械はとても古く、いつ壊れてしまってもおかしくありませんでした。しかし「機械は自分の子供と同じだ」と、毎日の手入れを怠らず、錆びた箇所をペンキで塗り替え、「ありがとう」と機械にいつも感謝していました。また機械は、そんな祖父の愛情に応えるかのように祖父が目指す製品を察知し、祖父の手となり足となり、まさに一心同体のように見えました。祖父の姿を見ていると、自分の力だけでモノづくりは出来ないということが実感出来ました。

モノづくりは、作り手がモノや道具に心を込めたとき、その心がモノや道具にも伝わり技術だけでは作ることの出来ない、素晴らしい製品が生み出されるのだと思いました。

昨年私は農産高校に入学しましたが、その時祖父に教えてもらったことがあります。それは「モノづくりは、よく観察することで、見えないものが観えてくるよ」ということです。その意味もよく分からないまま植物を育てていた私ですが、夏のキュウリの栽培で巻きひげの巻き方に興味を持ち、調べてみることにしました。巻きひげは巻き方を途中で変えることで、バネのように伸び縮みし、風などか

高等学校の部　最優秀賞　加藤幸乃さんの朗読

ら巻きひげが切れるのを防いでいる事が分りました。また何気なく観ていた庭のタンポポが、葉を放射線状に広げているのを見て、授業で習ったロゼット植物を思い出しました。ロゼット植物は、地面にへばりつくように葉を広げて、寒風や土が乾くのを防ぎます。タンポポの花は開花を終えると花茎を横に倒し、他の花の開花に席を譲り、種子が実ると再度花茎を立ち上げます。花茎を高く伸ばすのは、種子を遠くに飛ばすためです。

まるで植物が意思を持っているかのように感じられます。その他の植物も生き抜く為に、様々な工夫をしていることが分かりました。よく観察することで、目には見えない植物の知恵を観る事ができ、祖父のおかげで植物を育てることがより楽しくなりました。

大切なことを教えてくれた祖父ですが、様々な事情から今年の三月に工場を閉鎖しました。毎日当たり前の様に感じていた機械の音や熱気、そして祖父の姿が工場から消え、私はたまらない寂しさを感じると共に、祖父の歩んできた道を無駄にしたくないと強く思うようになりました。私は、祖父の仕事を受け継ぐことは出来ません。しかし祖父のモノづくりに対する愛情や、思いを受け継ぐことは出来ます。モノや道具を大切にして感謝していく心、そして愛情を注いでつくるという、祖父のモノづくりの精神を、今の私は農業や園芸といったモノづくりに生かしていきたいです。愛情をかけたからこそ出来る、心のこもった作物を、祖父のように作っていきたいです。

第二の人生を歩み始めた祖父は、少し寂しそうに見えます。私は、長年の疲れた体と心を癒す、園芸という新しいモノづくりを、祖父と一緒に楽しんでいきたいです。

## 高等学校の部　優秀賞

# 笑　顔

愛国高等学校　三年
下司結香

「申し送りを始めます！」

という看護師さんの元気な呼掛けと共に一日の実習は始まる。前日から新しい病棟に実習させていただいており班の皆には既に受け持たせていただく患者様がついていた。しかし、私が受け持たせていただく患者様は本日入院予定になっており、まだ患者様に挨拶も出来ていない状態であった。そのため私は申し送りを聴取しながら受け持ち患者様のことで頭が一杯だった。私は慣れない方とコミュニケーションをとることがとても苦手な上に極度なあがり症だ。しかし第一印象がとても大切なことも知っている。そのため自分の中で葛藤を繰り返し次から次へと不安が積もっていった。

時間は過ぎ患者様のもとへ指導者さんと一緒に挨拶をしに行くときがきた。緊張を隠しきれない笑顔で「失礼します。」と一声掛け病室に入り指導者さんがカーテンを開けた。患者様はベッドに腰掛けており優しそうな六十代位の男性だった。私が緊張混じりの笑顔で挨拶をするとニコニコしながら「こちらこそよろしくお願いします。」とおっしゃった。患者様のその笑顔で私の緊張は少しずつほ

ぐれていった。

患者様は胃癌を患っており、胃を全て摘出する胃全摘術を受けた。そのため腹部には手術時、開腹した切り傷があり、腹腔ドレーンからの排液も行っていた。その部分は毎日消毒をしてガーゼをあてておくのだが、それらは毎朝、回診時にその日の担当医が行う。それを介助するのが看護師で担当医に物品やガーゼを手渡していく。ある日、その介助を私が行わせていただけることになった。初めて行うことなので緊張していた。緊張のあまり頭が真っ白にならないよう患者様にベッドの端をお借りし消毒のために用意した物品をあらかじめ手渡す順に並べた。すぐに回診は回ってきた。担当医が患者様の観察を行い開腹部と腹腔ドレーンの挿入部の消毒をするときがきた。緊張は最高潮に達し額と背中には冷や汗が吹き出してきた。担当医の横に立ち必要な物品を順序良く担当医に渡していく。しかしガーゼは使用するものが三種類あり、渡す順序が予測していた順序と違い焦ってしまった。その結果、頭が真っ白になり手ぎわが悪くなり指導者さんのご指導のもと残りの介助を行った。回診が終わり病室に再び静けさが戻った頃、回診の介助が上手くいかなかったことについて落ち込みながら患者様のはだけたお着物を整えていた。患者様は頬笑んで私を見つめていた。そして

「初めてにしては度胸があったと思うよ。」

とおっしゃった。それまでは心の中で泣いていたが、その言葉で心が一気に晴れた。そして、その後に患者様はこう付け加えた。

「始めから上手くいくなんてそういないよ。」

と。私ははっとした。確かに患者様のおっしゃる通りで、始めから上手くいかないから実習を通して学習しているのだと。失敗を次に繋ぐことが出来れば、その失敗は意味のあるものになるのだと。それから先ほど指導者さんに教えていただいたガーゼの手渡す順序をメモしておき次の日にそのメモを活用した。その結果、前日の回診時よりも焦らず落ち着いて介助ができた。患者様は、そんな私を見て頬笑んでいらっしゃった。

この患者様に、私は何が出来るだろうと考えてみた。考えた結果、どんな時でも出来る限り患者様の側にいて、いつも笑顔でいようと決めた。それから時が経ち受け持ち終了日が二日後に迫ってきた。患者様も術後の経過が軌道に乗り退院に向けての退院指導が始まった。胃を全て摘出していらっしゃるので消化の良い柔らかいものしか食べることが出来ない。そして刺激物となるコーヒーや七味などの香辛料は摂取を控えなければならない。このような注意事項を患者様に説明するように指導者さんから助言をいただいたが勉強不足で、どのように説明をしていいのかがわからない。考えている間に、どんどん時間が経ってゆきその日一日あまり患者様のケアも出来ず、コミュニケーションも取ることが出来ずに終わってしまった。そのことに落ち込みつつ受け持ち最終日

である明日は、どのようなケアを行おうかと考えながら制服に着替えていると先生が申し訳なさそうに
「明日は台風のため実習が中止になりました。だから明日が受け持ち最終日の人は着替えて患者様に挨拶してきてください。」
と言った。私は動揺を隠せないまま再び実習服に着替え病棟へ急いだ。病棟に着き、患者様に挨拶をしに行った。
「失礼します。」
現れるはずのない私の姿を見て患者様は驚いていらっしゃった。全て事情をお話している間に涙がこみ上げてきて声が震えた。すると患者様は頬笑みながら
「そっか。それは残念だ。だけれど、下司さんが毎日笑顔で病室に来てくれたから沢山元気をもらえたよ。一人じゃ寂しい入院生活も下司さんが毎日来てお話してくれたから楽しかったよ。沢山勉強して良い看護師になってくださいね。ありがとう！」
とおっしゃって握手をしてくださった。
　私は何度も実習をやめてしまいたいと思った。しかし、患者様の励ましと笑顔があったからこそここまで頑張って来ることが出来た。そして患者様からいただいた励ましや感謝のお言葉を胸に今日も笑顔で実習に臨みたい。

# 経験を武器にして

東京都立瑞穂農芸高等学校　二年
関根愛衣子

　わたしは高校卒業後、獣医学部に進みたいと考えている。農業科の高校から進むことはとても難しいことだということは重々承知している。普通科目の学力は劣るかもしれないが学力よりも大切なことをわたしは知っているはずだと思う。
　まず一年生のとき、授業の一環として一人一羽、採卵鶏のヒナを受けとり飼育する。クラスの人たちと交代で餌と水を与えて育て、大きくなったらケージ鶏舎に移し、そこで産んだ卵を売るのだ。わたしは自分のヒナに〝リリ〟と名付けた。わたしたちはほとんど毎日、放課後にヒナのいる育すう舎に通い、リリたちの様子を眺めていた。数週間経つ頃には、ふわふわの産毛に包まれていた体から小さな羽がはえてきた。申し訳程度についていたトサカが赤みを帯びていった。体も大きくなった。週に一回授業でヒナを観察し、記録する時間があった。一週間前より確実にリリは成長していった。
　八月になると、いままでケージ鶏舎にいた先輩たちが育てた採卵鶏が廃鶏となり、賑やかだったケージ鶏舎は、しんと静まり返る。そして、眼光も鋭く、ツヤツヤした羽毛がはえ揃い、鮮紅のトサカになり立派な鶏に成長したわたしたちのヒナがケージ鶏舎に入るのだ。リリたちが産んだ初めての卵

はまだ小さくて、いままでよりも卵がとても大切なものに思えた。

九月になると、また一人一羽、鶏のヒナを育てることになる。今度は肉用鶏であるブロイラーだ。やはりふわふわの産毛に包まれていて力強くピヨピヨと鳴いていた。わたしはそのヒナに〝ささ〟と名付けた。しかしその成長ぶりは採卵鶏とは比べものにならないほどだった。とにかく早い。日に日に体は大きくなり、あっという間にツヤのある白い羽毛がはえ揃った。そしてさらに成長し続け丸々とした、まさに肉を彷彿させるような風貌になっていった。また、食欲も半端ではなく、餌をもって扉を開ければバサバサと羽ばたきながら勢い良く向かってくる。正直、恐怖感さえ覚えるほどだ。それでも、やはり成長の過程を見守ってきただけあって可愛い。

しかし、その餌やりをやめなければいけないときが刻一刻と近づいてきた。と畜のときが迫りつつあった。十一月頃になると、もう体重は2キロを超え始める。それが、と畜の目安なのだ。班ごとにと畜の授業をやっていき、わたしたちの班は最後だった。もうすでにと畜を終えた人たちからだいたいの様子は教えてもらっていた。でもいざ自分がやるとなると、やはり心臓はバクバクしていた。もう〝早く終わらせてしまいたい〟。その一心で真っ先にささを抱きかかえた。おとなしく抱えられるささの温もりが、なんだか悲しかった。

ペアの人にささを持ってもらい、鋭く研がれた包丁を頸動脈に押し当て、力いっぱい引く。刃が骨に当たったのがわかった。ぼたぼたと血があふれて落ちる。そして脚を持って血抜きをする漏斗（放血器）に入れ、息絶えるときを待つ。持っている脚が白くなっていき、どんどん冷たくなっていく。一度暴れたささはそれを最期にパタリと動かなくなった。次にお湯に入れてから羽をとる洗濯機のような機械（脱毛機）に入れ、残った羽を手でブチブチと抜いた。その姿はもう、ささではなく鶏肉だった。それから先生に教わりながら部位ごとに切り分けていった。鶏肉のつくりは複雑で、切り分けるのに思っていたよりも力が必要だった。スーパーでよく見るパック詰めの鶏肉のような姿になるころには、空腹を感じるようになっていた。ささだった鶏肉がとても美味しそうに見えた。人間も動物なのだ。

日ごろ何気なく食べているものは命だ。命を頂いて、生きている。それが〝いただきます〟だと実感した。家にその鶏肉を持って帰り、その日は内臓部を焼いて食べた。初めて食べた砂肝やハツはとても美味しかった。それ以来、わたしの好物だ。数日間は鶏肉料理が食卓にあがった。バンバンジーに唐揚げなど、本当にどれも美味しくて、急いで食べたいのを我慢してゆっくりと味わい

ながら食べた。家族も、と畜の話には顔をしかめるような素ぶりを見せつつも料理を食べて、美味しいね、と笑ってくれた。鶏肉の魅力を改めて教えてくれたささには、感謝している。いまも、わたしの携帯の画像フォルダにはリリとささの画像が多くある。時折その画像を見返してはあの日に想いを馳せるのだ。

そして今年の八月の末、今度はわたしたちの育てた採卵鶏が廃鶏となった。もう、リリたちともお別れだ。どんどんトラックの荷台に乗せられていく様子を遠くから眺めていると、なんとなく胸がつまった。二学期になればいまの一年生が肉用鶏のヒナを育て始めるだろう。その経験から一年生はなにを学ぶだろうか。

わたしはこれらの授業を通して、なによりも大切な、生きるとは、食べるとは、どういうことなのか、命の儚さや命の連鎖を知ることができた。

獣医師になれたとき、と畜の授業で身につけた度胸や覚悟で、難しい手術やなにか大きな病気を目の前にしたとしても、おじけずに向き合え、より〝命のために尽くす〟ことができると思う。わたしはこの高校で学んだ多くのことを獣医学部や獣医師として生かしていくためにも、この経験を武器にして挑みたい。

高等学校の部　佳作

# 素敵な瞬間を見て―私の目標

愛国高等学校　三年
上野愛恵

実習が始まり、私は内科病棟、整形外科病棟や保育園、老人ホームなど様々な場所へ行かせて頂きました。七月の中頃、産婦人科での実習がありました。私は以前から将来は産婦人科で働きたいと思っていたため、早く行きたいと感じていました。ですが、産婦人科で実習させて頂くことが出来るのは一日のみのため、とても悲しかったです。その分、実習時間ぎりぎりまで、出来るだけ沢山の知識を吸収して頭の中に入れようと考え、実習に臨みました。

院内では、主に施設の見学、産まれたばかりの赤ちゃんの観察、助産婦さんによるお母さんへの授乳の指導方法、分娩の立ち合いなどをさせて頂きました。施設の見学では産科、婦人科、小児科、形成外科があり、それぞれの特徴を知ると共に、そこに設置している機械の機能についても学ぶことが出来ました。そして、新生児の観察点に関しては、実習に行く前にそれらのことについて学習していたため、少しずつポイントを押えることが出来ました。また、気になったことはカルテから情報を収集したり、体験したい内容についても伝えることが出来たため良かったです。ベッドに眠っている赤

ちゃんは、私達が実習に行かせて頂いた前日や二日前に産まれた赤ちゃんが多く、小さくてとても可愛かったです。産まれたばかりの赤ちゃんは常に目を閉じていました。また、皮膚に感じてしまう刺激に関してはとても敏感で、泣いてしまうことがあります。そのため、オムツ交換を行う際に冷感を与えてしまうことのないよう、気をつけることが大切です。抱っこをした際は、本当に小さくて軽くて、落とすことのないように慎重かつ丁寧に行いました。小さな手の平で私の指をぎゅっと握ってくれた時は、思わず顔が緩んでしまいました。赤ちゃん達が寝ている新生児室にも沢山の工夫があることを知りました。その後、お母さんに対する授乳の方法の指導や、赤ちゃんをお風呂に入れる沐浴指導などの見学をさせて頂きました。今までに出産の経験をした方と、初めての方によって指導方法が変わっており、お母さん一人一人が行いやすい方法で出来るよう、個別性を重視して指導していました。途中で、指導者さんからお産を見学させて頂くことが出来ると声をかけて頂き、足早に分娩室まで向かいました。中に入ると、まだ始まっておらず、準備の段階でした。無痛分娩で行うのですが、天井は分娩の際にリラックス出来るよう、星が映し出されていました。天の川の形になっていて、とても綺麗でした。

お産が始まると旦那さんがいらっしゃいました。私達学生は足元で立ち合わせて頂きました。赤ちゃんが少しずつ出てくる様子を見て、気が付けば手に力が入ってしまい、自然と自分の手をぎゅっと握っていました。頭が出ると、次は肩が出るよう力を入れます。旦那さんも集中して見守っていました。助産師さんが「あと少しですよ。」と声を掛けているのを聞いて、私も頑張れと思いました。そして、遂に赤ちゃんが産まれてきました。産まれたばかりの赤ちゃんは本当に小さくて、お母さんの腕の中にすっぽりと収まっていました。その瞬間は本当に感動して、目に涙が溜まりました。赤ちゃんの誕生の瞬間は私の想像以上のもので、十八年前は私も同じような状態だったのだろうと思いました。また、産まれるまでの間は、十か月もお母さんがお腹の中で大切に育てていることを考えると、私も母に感謝しなくてはと感じます。母だけではなく、私の出産には沢山の方々が関わって下さっていたと、今回改めて分かりました。お産の瞬間を立ち合わせて頂くことは本当に貴重な体験であるため、許可して下さったお母さんと家族の方々に本当に感謝しています。この一日で見たり聞いたり学んだりしたことが、とても大切な経験となりました。この日を終えて、産婦人科で働きたいと思う気持ちが、また一段と強くなりました。

産婦人科へ実習に行かせて頂いて、新たな生命の誕生の瞬間を見させて頂くことが出来、私にとっては新たな節目となりました。産まれたばかりの赤ちゃんは本当に可愛いくて、ずっと見ていると赤ちゃんの純粋さが感じられ、とても嬉しかったです。

現在、私は脳神経外科病棟で実習をさせて頂いています。産婦人科とは雰囲気がガラっと変化しています。また、ケア

などの実習内容は全く違っています。私はうっかりと忘れてしまうということがたまにあります。ですが、このようなことは看護師ではあってはならないことです。それを実習で発見出来たことは良かったと思いました。しっかりと改善し、三年後に素敵な看護師さんとして働けるよう努力したいです。

# 看護実習を体験して

愛国高等学校　三年
**奥村沙希**

私の将来の夢は看護師になることだ。しかし、ただの看護師ではなく、笑顔を絶やさず患者様から慕われる、行動力のある看護師になりたいと思う。小さい頃から抱いていた看護師になるという夢は、一瞬たりとも消えることなく、私の未来を明るくしてくれた。

その夢を持ち続け、私は高校から愛国高校の衛生看護科に入学した。まずは高校二年生の行事とする戴帽式に参加することを目標にし、中間・期末テストから小テストまで気を抜かずに頑張った。高校二年生の夏は、戴帽式試験に合格するため必死に勉強した。戴帽式試験は筆記試験と実技試験があったが、私は筆記試験が不合格となってしまった。仲の良い友達が合格し、早速戴帽式の話をしているのを見て、とても切なく悔しい気持ちになった。私はすごく頑張ったけど、きっと友達はそれよりもっと努力をしたのだろうと思った。2回目の試験では悔しさをバネに、苦手な科目を克服し臨んだ。その結果、無事に筆記試験にも合格することができ、憧れだった戴帽式で、ナースキャップを戴くことができた。戴帽式が終了すると早速、病院実習の準備がはじまる。毎日事前学習を進め、学校では記録の書き方を教えていただき、いよいよ実習がはじまるのだと実感がわいてきた。

高校二年生の冬は基礎看護実習として2ケ月間実習に行き、病院とはどういった場所なのか、看護学生として実習するにあたって気をつけるべき注意点など、基礎的なことを学ばせていただき、大切な経験となった。

これは基礎実習で実感したことだが、患者様とのコミュニケーションは、本当に多くの情報を得ることにつながるのだ。情報を得るだけではなく、患者様との信頼関係にもつながる。信頼関係がきちんと築かれているのか、築かれていないのかで、今後のケアの仕方も大きく変わってくる。コミュニケーションと信頼関係は結びついていると思う。看護を行う側として、積極的に信頼関係を築いていくためにも、コミュニケーションは私の方から頑張っていきたいと思っていた。

しかし、物事はそう簡単にうまくいかず、話しかけたり楽しいお話をしようとするが、患者様自身が精神の状態が不安定な方だったために、工夫して少しずつコミュニケーションをとっていく必要があった。具体的には短時間で終わらせる、患者様の食事で好きな物をお話の中に加えるなどです。実際に行ってみると、少しで別の顔や表情がみられるようになっ

た。その時、看護師のちょっとした工夫やアイデア一つでこんなに違うのかと思った。

また、ケアに対する拒否がはじめはあったために、患者様の全身状態を観察したり点滴の刺入部位の状況などを把握することが難しかった。患者様の状態を知り、その上で看護計画をたてていかなければならないのに、なかなか前に進めずにいた。しかし、毎朝タオルを持って挨拶をしに行き、その度に「少し体を拭きませんか。」などと声を掛けたり、手浴や足浴をすすめた。最初は嫌がっているように見られ、私自身もひかえめにした方がよいかと悩んだりもしたが、ある日、いつものように訪室すると、そこには笑顔の患者様がいらっしゃった。その時の患者様の笑顔は今でも忘れられない。その日は温かいタオルで患者様の背中を拭いてコミュニケーションをとりながらの援助をさせていただいた。どんなに拒否があっても、患者様のためを思って継続することで、気持ちは行動に表れ伝わるのだと実感した。

そんな情けなくも悔しい思いをしてこそ、頑張ろうと思う気持ちは強くなっていった。学校の図書室で本を借りては、家で地道な努力をはじめた。同じ実習グループのメンバーとも情報を共有したり、お互い助けがいる時は助け合うように意識しなくてもできるようになった。友達との助け合いもあって、辛いことも乗り越えられたのだろうと思う。実習中に指導者さんから教えていただいた体位変換時の留意点や、処置の時に気をつけなければならない細かいポイントの一つ一つを、忘れないうちにメモして家でまとめ表を作るなど、勉強にも工夫をして、自分なりに一番覚えやすいやり方を見つけた。情報収集をした際には、必ずその情報から考えられることを記録し、次回の援助の時に役立たせることができた。それらの学習したことを実際の現場で活かすのに、計画をたて、その計画を指導者さんに見ていただいて直す所を教えていただき、よりよい援助計画を目指した。そして、ここまで頑張ってやっと、自信を持って患者様のもとへ行き、ケアを行うことができた。ケアが終わって片付けに入ろうとすると、患者様が私に向かって、「安心してあなたに頼めるわ。本当にありがとう。」とおっしゃった。今までの実習の中で、一番印象に残る、嬉しい言葉だった。

私が看護実習生になって、まだ1年と経たないが、多くの患者様と関わることができた。一人一人の患者様が私に教えてくださったことは、きっと一生忘れず、経験や知識として私に身についていく。これまでに関わったたくさんの患者様がいるからこそ、今の私がいる。実習中に大変なことがあっても、全ては患者様の笑顔や優しい言葉の一つで乗り越えられると学んだ。これからどんな試練があっても、仲間と助け合い、決して諦めず夢に向かって進むことができると思う。実習で体験したこの気持ちを、決して忘れずもっとたくさんのことが学びたい。そして、未来で私たちを必要としている患者様のために、これからも頑張りたいと思う。

# 夢

愛国高等学校　三年
杉本莉佳子

私が看護師を目指すきっかけとなったのは、祖父が入院していた病院の看護師の姿を見たことです。祖父は癌を患い入院していました。その時の献身的に看護をする看護師の姿を見て、「私も人の役に立てる仕事をしたい」と思うようになり看護師を目指すために、両親の協力もあって愛国高校の衛生看護科へ入学することができました。

高校一年生では約半分が看護教科で、覚えなければならないことが多く、特に定期テストの時は苦労しました。また、実技の授業ではベッドメーキングや清拭などについての練習を多く行いました。二年生になると、戴帽式試験に向けて看護科全員は真剣に勉強に取り組み、また、実技試験もあるため練習を何度も繰り返しました。合格しなければ戴帽式に出られず、さらに病院実習にも行くことができないからです。看護科の柳組、桜組全員で互いに応援し励まし合いながら取り組み、看護科全員が試験に合格することができました。そして十一月の戴帽式ではナースキャップを戴くことができ、この式で以前より一層看護師になりたいという気持ちが強くなりました。

そして高校二年生の一月に病院での基礎実習が始まりました。現場での実習で初めて病院へ行った時の今までとは違う緊張と不安は今でも鮮明に覚えています。一ケ月の基礎実習は、二週間で病棟が変わりました。一クールの二週間はまだ病院に慣れず、戸惑っていることが多かったのですが、指導者の方が優しく丁寧に教えて頂いたので不安などは除々に少なくなり自ら考えられることが多くなりました。二クール目で病棟が変わっても一クールで行ったことを生かして実習を行うことができました。受け持たせて頂いた患者様のためにケアを行って、患者様から

「ありがとう。」

という言葉と笑顔を頂くことができた時は、大きな喜びとやりがいを感じることができました。しかし基礎実習では自分から積極的に行動できず、「これをやりたいな。」と思ってもなかなか言えず行動にも移すことができなかったことをとても後悔して、そのまま基礎実習を終えてしまいました。

三年生になり、さっそく五月から実習が始まりました。基礎実習の時のような後悔はしないよう自分から動こうという目標をもち、最初に保育園実習へ行きました。保育園実習では五、六歳のきりん組、三、四歳のうさぎ組、二歳のくま組、零、一歳のひよこ組へ一日一組ずつ実習させて頂きました。保育園では昼食やおやつが出されますが、アレルギーのある子供には

絶対に食べさせてはならないものが出た場合周りの子供達と区別して食べさせていました。保育園にも看護師がおり、離乳食の食べさせ方など様々なことを教えて頂き勉強になりました。

次に実習させて頂いた場所は産婦人科のクリニックです。ここでは新生児の診察を見学させて頂いたり、授乳指導や沐浴指導の様子、分娩を見せて頂いたりしました。私が特に印象に残ったのは、分娩です。児が娩出される様子を実際に見たのは初めてで、産んでいるお母さんの苦しそうな顔から児が娩出され本当に嬉しそうな顔になった時の瞬間がとても感動しました。私の母もこんな風にお腹を痛めて私のことを産んでくれたんだと思うと感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして児が娩出した後に胎盤や臍の緒を実際に見せて頂きました。自分が思っていたより臍の緒はとても長く、実際に自分の目で見ることができて良かったなと思いました。このクリニックの実習は一日だけでしたが、とても貴重なものを見せて頂いたり、経験をして、命の重さや大切さを心から感じることができました。

六月に入り、私達のグループは成人実習へ行きました。私達のグループは一クールで、外科病棟で実習させて頂きました。外科病棟は手術を行う患者様が多く、私が受け持たせて頂いた患者様も手術をされる患者様でした。手術の見学もさせて頂き、手術室の看護師の方々や医師の方々にたくさんの事を教えて頂き勉強になりました。そして、退院する際に個別性を考えたパンフレットを作成し退院後の生活で注意して頂きたいことをまとめ、説明をして渡すことができました。説明している際はとても真剣に聞いて下さり、渡すと「ありがとう。本当にありがとう。」ととても喜んで頂けました。お礼を言って下さると「今まで頑張って良かった」と思えました。しかし、一クールで私はミスしたことがありました。看護師に聞いて積極的に行動しなければならない場面で、声をかけず黙っていたため本来の見学ができませんでした。本当に悔しく、自分の積極性のなさに腹が立ちました。指導者さんにもご指導頂き今後このようなことがないようわからないことはすぐに聞き、積極的に行動しなければいけないことを学びました。

まだ残り約一ケ月ほど実習はありますが、これまで乗り越えられたのは、両親の応援や同じ夢をもつ仲間が近くにいてくれたおかげだと思います。特に一緒のグループで実習している友達には本当に力になっているなとよく感じさせられます。今後の実習も失敗することがあるかもしれません。ですが、失敗を恐れて何も行動しなければまた同じ失敗を繰り返す結果になってしまうと思います。だから苦しいこともあると思いますが、あきらめずに何事にも挑戦していきたいです。看護師になるという夢をあきらめないよう最後まで仲間と共に努力していきたいと思います。そして天国の祖父にいい報告ができるよう、看護師になれたと言えるよう頑張らなければいけないと思います。

# 病院実習を行って

愛国高等学校　三年
畠山花香

私は現在、高校の衛生看護科で看護師になる為に勉強しています。看護師になりたいと思ったきっかけは、テレビのドキュメンタリー番組で看護師の方達が働いているのを見て「すごいかっこ良くて素敵な仕事だな。」と思った事です。それから私は、よく看護のテレビを見るようになり、テレビを通して看護の現場を見て私も看護師になって患者様の為に何かしたいと思うようになりました。その様に、看護師について色々と調べていくうちに看護師という職業に憧れて、看護師になる事を決意しました。

しかし、いざ看護師の勉強を始めると、覚えなければならない事が多く、看護師への道が厳しい事を実感しました。看護師になるには、病院実習を行わなければなりません。私は、実際に病院で看護師の様に患者様を受けもつ事に対して不安を感じていました。患者様に嫌われたらどうしよう、大きな失敗をしたらどうしようと、様々な心配が胸の中に押し寄せてきました。

そして、基礎実習が始まりました。基礎実習では二人の患者様を受け持つ事になりました。一歩病院に入れば、実習だからといっても自分の行動で患者様を危険な状態にさせてしまう事もあり、行動や発言の一つ一つに責任を持たなければなりません。正しく援助できるのだろうか、患者様と良いコミュニケーションがとれるのだろうかなど様々な不安が私の頭の中を一杯にしました。そんな不安を抱えたまま、初めての受け持ち患者様の所へ御挨拶しに行きました。私の初めて受け持たせて頂く患者様は、六十代の大腿骨頸部骨折の方で、お話が好きな明るい方でした。私は普段、高齢の方と接する事が少なく、どんな話をすれば良いか、沈黙が続いたらどうしようと思っていました。しかし、患者様は、私が挨拶すると笑顔で挨拶して下さり、自分の家族の事や住んでいる家の事など沢山話して下さり、とっても明るい方だなと感じました。患者様はリハビリを毎日行っており、私もリハビリを見学させて頂きました。患者様は、今まで車椅子だったのですが骨折部が徐々に回復しているため、松葉杖を使って歩行するリハビリを行っていました。リハビリ師さんの邪魔にならないよう、援助や声掛けはしてはいけませんでしたが、私は患者様の後ろを歩きながら、その様子を観察していました。リハビリ中の患者様は、いつもの明るい患者様とは異なり、眉間に皺を寄せてリハビリ師さんに不安や弱音を吐いていました。私は、その様子を見て明るい元気な姿との差に驚きました。私は、この患者様はいつも明るく冗談を言っていたりしたため、悩みや不安は無いものだと思い込んでいました。しかし患者様のリハビリ中の姿を見ていると、どんなに明るく見えても、何かしらの不安や悩みは誰にだってあるものだと

気付かされました。悩みがあっても言い出せない人もいると思います。そんな時、私達看護師が少しでも患者様の気持ちに気付く事ができたら、少しでも安心させる事ができるのではないかと感じました。私も患者様のその様な気持ちに気付けるようになり、より患者様に寄り添える看護師になりたいと思いました。

そして、二人目の患者様は、今年で百歳を迎え、訛があり、言葉も不明瞭でした。その為私は、患者様のおっしゃっている事が聞きとれず、何度も何度も聞き返してしまいました。会話は続かず、気まずい雰囲気になる事があり、聞き返す度患者様を不愉快にさせてしまうのではないかと不安になりました。その為、患者様と会話する事や病室に行く事が少なくなり、患者様の情報をカルテなどからとるようになりました。そんな時、指導者さんに「患者さんの所に行かないの？患者さんの言葉が聞きとれなくて何度も聞き返してもいいから、患者さんとの時間を大切にしなさい。」と言われました。私は、何度も聞き返したら患者様を怒らせてしまうのではないかと不安でした。けれど、とにかく患者様と話す事を増やし、常に患者様の隣に居るように心がけました。やはり、初めは聞きとれませんでしたが、話をしていくうちに、患者様の表現の仕方や表情から、おっしゃっている事が徐々に分かっていくようになりました。その時、指導者さんの言っていた患者様との時間を大切にする事の大切さが分かった気がしました。私が患者様の言葉を聞きとれなかったのは、患者様の事をまだ知っていなかったからだと思いました。患者様の傍に居る事で、その人特有の表現の仕方や、昔の言い方がある事を知りました。患者様の事は、いくらカルテを見ても理解する事はできません。患者様との時間を大切にし、患者様の傍にいる事が患者様を理解する事に繋がる事を実感しました。また、会話を通して、いつも今日の日付けや時間、外の様子を聞いて来る事などに気付きました。患者様は、長年入院されており今は自分の力で起き上がる事も出来ません。患者様のベッドは窓際にありますが、患者様の見える外の景色は、窓から少しだけ見える空だけである事に気付きました。長年ベッドの上だけで過ごしていると、季節や時間が分からなくなるのかなと感じました。私はそれからは、病院の周りに咲いている花の事や雪が降った事、最近のニュースの事などの話を患者様にするようになりました。これも、常に患者様の傍にいたからこそ気付く事ができたのだと思います。看護師になったら、一人の患者様の傍にずっと居る事は出来ませんが、忙しい中でも患者様との時間を大切にしていきたいと感じました。基礎実習では、主に援助の見学や患者様とのコミュニケーションを行いました。この実習を通して、患者様の思いやその患者様を支えている御家族の気持ちを知る事ができました。

# 未来のレール

岩倉高等学校　三年
**青島圭汰**

「絶対に鉄道員になるんだ」

真新しい制服に袖を通してまだピカピカのボタンに手をかけたあの日、私はそう強く誓いました。桜の咲く校門から電車の運転席に座る自分まで、未来への「レール」が一直線に続いている気がして、とても嬉しく思ったのを今でもよく覚えています。

私が所属する岩倉高校の運輸科は生徒の多くが鉄道会社への就職を目指しています。教科も国語や数学といった一般教科の他に、鉄道概論や運転法規など、その名の通り鉄道についての勉強を始めとした専門教科も学びます。専門教科の中では、切符に関する規則や接客のマナーから旅行業務取扱管理者の資格を取得するための勉強法に至るまで、多岐に渡っています。その中の一つに観光地理という科目があります。これは一年次に履修する科目で、国内の世界遺産や観光地、国立公園などの概要や特徴について学びます。週に一時間の授業ですが、これが私の「人生のレール」を切り替えたと言っても過言ではないと思います。

担当する先生は日本ならば知らない場所はないのではないかというぐらいに観光地を知り尽くしており、毎時間各地のエピソードを楽しそうに話してくださいました。私はそれを聞く度に「自分がまだ知らない場所がたくさんあるんだ。日本は、いや世界は自分が思っているよりずっと大きいんだ」と感じ、まだ見ぬ場所への憧れを掻き立てられました。気がつけば、この授業が毎週の楽しみになっていきました。

そんな観光地理の授業は、私にたくさんの影響を与えました。まず、今まで乗ったことのない列車への乗車が中心だった私の旅行に「観光」という概念を作りました。実際に駅から出て街を歩いてみると、「その土地」を五感で味わうことができました。これはガイドブックを眺めていたり、駅の中にいたりするだけでは決してできない経験でした。「列車の小さな窓から景色を眺めているだけでは分からないことがこんなにたくさんあるんだ」と感動を覚え、自分のこれまでの旅行の方法を後悔した程でした。また、観光地や旅行を歌った音楽や小説にも興味を持つようになり、知識の量はこ

れまでにない勢いで増えていきました。さらに今まで見向きもしなかった山並みや海の色を美しいと感じるようにもなり、いつしか私は「鉄道旅行好き」から本当の「旅行好き」へと変わっていました。他にも地理に関する検定を受けてみたり、授業の学習内容を活かして旅行業務取扱管理者の試験を受けたりと、鉄道一色だった私の毎日を大きく変えていきました。

二年生の冬になり、そろそろ本格的に進路を決めなくてはならなくなった頃、私は悩んでいました。岩倉高等学校に入学した本来の目的である鉄道会社に就職をするのか、地理や観光についてもっと知識を深めるべく大学に進学するのかを決められずにいたのです。周りの友人達は鉄道会社への就職に向けて着々と準備を進めている中、私は一人取り残された気分になり、とても不安でした。

春になって、私はふと旅行へ出かけました。海沿いを走る小さなバスに乗り、近くの席に座ったご年配の男性と話をしました。その中で私の進路についての話になり、できれば避けたい話だったのですが、まだ決められずにいることを告げました。すると男性は、「高校生なんていったら、どうしたらいいかまだ分かんないもんね、大学に行って勉強しながら決めたらいいよ」と言いました。

私の心の中を一陣の風が吹き抜けた気がしました。この旅に出なければ、私はきっと今でも悩んでいたことでしょう。私はこの言葉に背中を押されて進学を決意したのですから。

「鉄道会社に就職しないのならば岩倉高校でなくても良かったのではないか」

そうした問いに、私は確信を持って答えられます。「そんなことは決してない」と。この学校に入学したからこそ、観光地理と出会い毎日が変わったのです。何より、同じ趣味を持つ友人がたくさん出来たのですから。

「運輸科に入ったからといって就職しなければいけないなんてことはないんだ」

私は今日も、思い出と引き換えに年季の入った制服に袖を通します。入学式を控えたあの日の私は、今の時期の自分を、就職試験を目前に、力強く前進する姿を想像していました。そんなふうにはなりませんでしたが、私は私。これからは、多くの仲間とは少し違った方向へと続く「未来のレール」の上を、全力で走って行くつもりです。

# 私が鉄道実習を通して学んだ事

岩倉高等学校　三年
安部康介

私の高校では二年次の七月に、希望者を対象として「鉄道実習」といった体験学習が実施される。この学習は、ＪＲ東日本や、ＪＲ東海の社員の方々の協力により、実際に駅員として駅に立ち、お客様に対してご案内を行うといったものだ。「実習」という名称がつけられているが、社員の

方々の中に混じり、実際にお客様に対応をするので、責任感と緊張感を常に持って行わなければならないという事を実感した。鉄道実習を行う前に、校内で事前学習が行われた。そこでは、「鉄道実習日誌」といったものが配られた。その日あった出来事、実習の成果などを記入し、社員の方にチェックしてコメントを頂くというものだ。一日一日の出来事を細かく記入しておくことで、振り返ることができる。さらに挨拶の練習なども行われた。挨拶はやはり、これから社会人になってからも最重要のコミュニケーションであると私は考える。明るく元気に挨拶をすることで、その後の仕事もやりやすくなるし、何より気持ちが良い。そして、二つめに重要であると考えるのが、最低限の身だしなみである。この事前学習でも厳しい身だしなみチェックが行われた。他の人から見て、清潔感のある人は、やはり印象が良くなる。逆に清潔感がない人は自己管理があまり出来ていないと見られてしまう。夏休みに入り、いよいよ鉄道実習がスタートした。実習の時間は、朝十時から夕方五時までだった。自分が実習する駅は山手線の大崎駅だ。駅事務所の前までたどり着いたが初日という事もあり、私はとても緊張していた。実習生は私のほかにも二人いて、全員で三人であった。事務所の中に入ると、社員の方々に温かく迎えていただいたので嬉しかった。まずは朝礼に参加させて頂いた。朝礼では、社内目標などの朗読があった。朝礼が終わると、いよいよ駅の改札に立った。お客様が主にしてくる質問は、電車の発車番線、切符の値段、乗り継ぎの仕方、周辺施設の場所などについてだった。あらかじめ、駅の周辺施設や発車番線についてなど下調べをおこなっていたので、お客様になんとかご案内をすることができた。しかし、お客様に対して分かりやすく、かつ丁寧な言葉遣いでご案内するという事が、やはり難しかった。1日目はあっという間に終わり鉄道実習は2日目に突入した。この日の朝、私に忘れ物について尋ねてきた女性のお客様がいた。しかし私はそれについてうまく答えられず、結局そのお客様は怒って帰ってしまった。その日の午後からは、反省点を生かしお客様にどうしたら分かりやすいご案内ができるかという事を考えながら、仕事に取り組んだ。2日目が終了し、鉄道実習も3日目となった。朝礼終了後、実習生は全員駅長に呼び出された。そこで私達は「駅で働くという事」についてのお話を聞かせていただいた。私が特に印象に残ったのは、「駅で働くという事は、その駅のファンを増やすという事でもあるんだよ」という駅長さんのお言葉だった。ただ駅で淡々とお客様の対応をするのではなく、その駅にまた来ていただけるように一人一人のお客様に心をこめて対応をしていくことが大事なんだという事を教わった。これは、駅員として仕事をするうえでとても大切なことであると私は思った。そのお言葉をしっかりと胸に刻み込み、午後の対応を行い日誌にも書き留めた。実習5日目、この日は天候があまり良くなく、午後からは雨が降り雷も鳴っていた。その悪天候の影響で、埼京線と湘南

新宿ラインそれぞれに遅延が発生した。想定外の出来事で、少し自分にも焦りが生じてしまい、遅延のことについて尋ねてくるお客様にうまく対応ができなくなってしまった。しかし、駅員として改札に立っている以上、自分が焦っていてはお客様にも影響が出てしまうと考えたので、焦らずに落ち着いたご案内を心がけると、お客様にも理解していただく事ができ、お客様を怒らせてしまうということは無かった。そして最終日の実習終了後、社員の方々にお礼を言い鉄道実習は終了した。私は、今回の鉄道実習で多くのことを学ばせていただいた。駅員として働くには、いつどんな事態が発生しても、それに迅速かつ正確に対応ができるようにならなければならないこと、お客様には「絶対に」ご迷惑をお掛けしないこと。この実習中に色々な事を経験し、駅員は大変だと実感させられることもあったが、同時に駅員という仕事は楽しいという事を感じた。実習においてお客様をご案内するという対応をし、お客様に笑顔で「ありがとう」と言って頂けたときはとても嬉しかった。その時、私は駅長さんの「鉄道員はお客様からやりがいをいただいている」という言葉を思い出した。私は将来鉄道会社に入社し、駅に来ていただいたお客様を、笑顔にできるような駅員になりたいと思った。

# 学んだことは「2つの心」

岩倉高等学校　三年
野口雄太郎

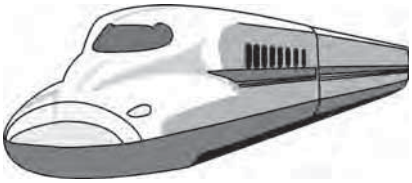
僕は東京上野にある、岩倉高等学校に通っている。岩倉高校というと、まず多くの人が鉄道学校という印象を受けるだろう。しかし実際の受験生でない限り、どのような授業をしているかわからない人がほとんどだと思う。

岩倉高校の運輸科では、だれもが鉄道について学ぶ授業を受ける。運輸科の中でも商業と工業の2コースに分かれており、僕は工業コースを履修している。商業コースが「簿記」の授業を受けているのに対して、工業コースには「工業実習」が教科に入っている。読んで字のごとく、機械を扱う教科だ。1年生では自分たちでパソコンのCAD、CAMを使い設計図を描き、そのうえで旋盤・溶接・溶断の技術を使い、帽子掛けを制作した。2年生は手作業での製図とロボットを動かすコンピューター制御、そして3年生の現在は課題研究と題して、自分たちですることを考え、作品の制作や資格の取得を行っている。僕は他の生徒2人と大きな鉄道模型制作をしているが、中にはCGなどを行っている同級生もいる。

正直な話、高校に入学するまで、工場などで働く人たちのことは、社会科の授業で自動車工場について学んだぐら

いで、あまり深く考えたことがなかった。しかし、自ら手を動かして製図から制作、組み立てなどを行ったことにより、部品などを制作する工場の職人の人たちの苦労が分かったのと同時に、日本の工業技術のレベルの高さに感銘を受けた。1年生の時に制作した帽子掛けは今でも自宅で使われているが、このように自分で作ったものが誰かの役に立っているという満足感がとても嬉しかった。

そして運輸科にいるということで忘れてはならないのが鉄道の授業である。全国に工業の授業や実習を受けられる高校は多々あると思うが、それと同時に鉄道専門の授業を受けることができる高校は全国でも岩倉高校だけだと思う。



鉄道の授業は学年ごとに学ぶ内容が段階的にレベルアップしていく。1年生では「駅」をテーマにし、駅の業務や鉄道の運賃・料金の計算、また旅行業を営む上で必要となる旅行業法や日本全国の観光名所の勉強などを行う。2年生では「車掌業務」として、体の不自由なお客様や、高齢のお客様を安全に案内するにはどうすれば良いのかを、自分たちで車いすを操作するほか、実際に高齢者疑似体験をしながら考える授業のほか、さらに複雑な運賃・料金の計算、信号などの鉄道の安全の仕組み、旅行業約款という旅行の契約書の内容を勉強する。そして3年生ではいよいよ「運転」について学ぶ。運転の授業では学校にある鉄道シミュレーターを使い、鉄道の基本的な操作方法を教わる。このシミュレーターは天候などを自由に設定することができ、雨や雪などによって変わるブレーキのかかり具合も再現しながら、より本物の鉄道に近い環境の授業を受けることができる。

この鉄道の授業で学ぶことは、普段のテストだけでなく、資格取得に大切な役割を果たす。旅行代理店に必ず一人は必要とされる旅行業務取扱管理者の試験だ。旅行業法、運賃・料金計算、旅行業約款、観光地理が試験科目となっているので、まさに授業がそのまま資格勉強になっていると言える。このような勉強ができるのも岩倉高校ならではだと思っている。

このような授業で学ぶことは、社会人になった際に、製造業や鉄道・旅行関連の仕事に就かなければ実際に生かす機会はないかもしれない。だが僕は、この3年間はこのような仕事をしている人が社会にいることを体験する、いわば3年間のインターンシップなのではないかと考えている。製品を作っている人たちは決して目立つ存在ではない。だがこの国を円滑に動かしていくためには欠かすことができない人たちだ。誰かのために頑張るという「縁の下の力持ち」の心、そして妥協せずにより良いものを作り続ける「職人魂」の心。この2つの心が3年間の授業を通して一番に学んだことである。僕もこれから進路を決める時期に入っていくが、どのような職業に就いたときであっても、この2つの心を忘れずに日々の仕事を行っていきたい。

# 体験してこそ見えた世界

岩倉高等学校　三年
宮﨑和幸

東京都台東区上野。東京の北の玄関に学び舎を置く岩倉高等学校に鉄道員を志して入学してから二年半学び続けた中で、「鉄道員」という仕事を体験的に学び、大きな課題を突きつけられ、その見方が変わった転機があった。それが鉄道実習である。

岩倉高等学校では、鉄道会社の協力を得て、毎年夏季と冬季の休暇を利用し、二年生が駅員として実際に案内業務などを行う鉄道実習が行われている。私がその中で学んだことは大きく二つある。

最初に学んだのは、三百六十度の気配りだ。駅では列車の発着に合わせて、多数の旅客の往来がある。その中で、私は大勢の旅客に囲まれ対応に追われていた。偶然にも点字ブロックの上で案内をしていたところに白杖をつきつつ歩く旅客が近づいてきた。ぶつからないよう、さっと点字ブロックの上から案内中の旅客を誘導しつつ離れた。しかしその先に突如、列車の到着で降りてきた別の旅客が押し寄せてきて、私は流れを邪魔してしまった。

このとき私は、白杖をついている旅客には気付いて対応できたが、その先の旅客までは見えていなかった。旅客の対応で視野が狭まり先を見据えた対応までできなかったのだ。

目先の事態に対処しつつ視野を広く持ち、次に起こる事を見据えた対応をとること。これが鉄道員に求められる最低条件なのであろうと身をもって感じた。

二つめは、想定外の事態にも冷静に対応することができる力だ。

旅客は時折、こちらの思ってもいないことを尋ねてくる。よくある旅客の質問と言えば、付近乗換や観光地の最寄り駅に行きたいと言うのがほとんどである。しかし、千葉の某駅での実習だった私に、突拍子もなくこんな質問が飛んできた。

「角館に行きたいんですけどどうやっていくんですか」

角館と言えば秋田県にある田沢湖線の駅だ。この質問をされた直後、頭が真っ白になった。あまりにも唐突で、もはや何線の駅かも思い出せない。何とか案内しようと必死だったが、数多くあるルートから何をどう案内すべきか分からなくなり、結局社員の方にお願いする形となった。

冷静に考えれば、このような難しい質問は即座に社員の方に対応していただき、正確な情報を旅客に素早くお伝えすべきだ。知識の不十分な実習生が独断で案内をして、誤った情報を教えてしまい、ご迷惑になってはならない。

最終的に社員の方に相談するところまでは行き着いたために問題とはならなかったが、余りにも時間がかかりすぎた。想定外の質問で冷静さを欠き、このとき旅客が求めていた「正確な情報を知りたい」というニーズが抜けて、自己解決に重きを置いてしまったのだ。

もし、これが人命に関わるような事だったとしたら、文字通り致命的である。いかなるときも乱れない冷静な判断力は私が最も学ばなくてはならないことだと痛感させられた。

さて、この鉄道実習で最大の収穫と言える、私の鉄道会社の職場のイメージを変えたものがある。それは、職場の意外な雰囲気だ。

日本の鉄道は高い定時性と安全性が世界一とも称えられるが、それらを維持することは容易ではなく、当然厳しい規定や検査などが存在する。故に、そこから推察される職場は厳しく格式張ったものだろうと思っていた。

しかし、現実の職場の第一印象は「アットホーム」そのもので、堅苦しさは無いのだ。もちろん甘い職場ではなく、たとえ新入社員でも、ベテランと同様、鉄道の「プロ」としての実力が求められる。

雰囲気の余りの意外さに、担当社員さんに「何故こんなにアットホームな雰囲気なのですか」と質問をしてみると、私としては納得の返答を頂いた。

社員の方曰く、他の会社員と違い、鉄道員は二十四時間勤務が基本で、家よりも職場にいる方がずっと長い。勤務の間ずっと同僚と顔を会わせ続けるわけだ。極端な話、気の合わない人ともずっと一緒に勤務しなくてはならない。過度に厳格な雰囲気では例え仲のよい人であっても、お互い気疲れしてしまうから、お互い家族のような雰囲気で職場を包み、円満な人間関係を作れる環境にすることを心がけているそうだ。

鉄道業界だけに限らず、大抵の会社ではその業務を多くの役割に分担させ、それらが互いに連携を取ることで機能し、一つの会社として成立している。各々の連携を確たるものにするには円満な人間関係は必須だ。連携の強化という観点から見ても、この心がけは的を得ているし、実に合理的である。

このお話を聞いて、私は改めて純粋に鉄道員になりたいと思った。今までは、業務内容にしか目が向かなかったが、この暖かい「職場」で鉄道のプロを目指してみたいという新しい視点からそう思ったのだ。

この鉄道実習は、私に新しい視点を与え、「大きな課題」を突きつけた。それは、気配りであったり冷静な判断力であったりという明確な課題である。その後の学校生活では、この課題を常に意識し行動したことによって、気配りと冷静な判断力が着実に身に付いてきた。気付けば「大きな課題」は「大きな長所」と「大きな自信」へと変わっていた。この大きな武器を得たからこそ、私が今、夢を叶えるために取り組んでいる就職活動に堂々と打ち込めるのである。

# 農業で知った作ることの喜び

東京都立大島高等学校　三年
影山雅晃

私は、大島高校農林科での3年間で多くのことを学びました。農林科では、野菜・草花・畜産・森林の各分野を学ぶことができます。農産物を栽培育成し、それを加工・販売したり、地域に植栽したりすることを通じて、農業の楽しさとやりがいを知りました。

野菜分野では、校内での販売実習や、企業と連携してデパートで販売する取り組みを経験しました。大島高校の学校祭では農林科の生産品販売があり、大勢の島の人たちが楽しみにしています。新鮮な野菜を安く買えるので、早朝から長い行列ができるほどです。私たちも、朝6時から農場でダイコンやハクサイを収穫し、調整しました。野菜を洗う水も冷たく、虫が付いていないか一つずつ確認する作業が大変でした。でも、お客さんが私たちの収穫した野菜を買ってくれて、大事そうに持っていく姿を見るととても嬉しくなり、これまでの苦労は忘れてしまいました。

全国農業高校収穫祭に参加した時は、学校で栽培した島トウガラシで作ったラー油と自分たちで実を集めて作った椿油を販売し、地域の特産品をアピールできました。一番思い出に残っているのは二年生の時に日本橋高島屋で行ったお中元セールです。私たちが生産したキュウリやトマトを、「沈菜館」と言う食品加工会社さんがキムチにしてくれたものをお中元商品として販売したのです。自分たちが作った野菜がこのように姿を変えて、東京の大きなデパートで加工品として売られているのがとても不思議な感じでした。テレビの撮影もあり注目の高さに驚きを隠せませんでした。島でも大変話題となり好評で、冬のお歳暮ではハクサイ・ダイコン・コマツナを出荷しキムチに商品化されました。

草花分野では、花の栽培方法と活用方法を学んでいます。私は、植物の栽培方法について深く学びたかったので三年生では草花分野を専攻しています。加工や販売する機会は多くないのですが、花壇に植えたり、小中学校や保育園で花について教える交流授業をしています。この夏には、インターハイの相撲競技会場になった両国国技館の会場装飾をしました。それに向けて春先からカンナ・トレニア・サルビアなど20種類以上の草花を準備しました。開花のタイミングを合わせることの難しさを知りましたが、仲間と力を合わせてきれいに装飾することができて大変満足でした。今後も、花を使った地域貢献に取り組んでいこうと考えています。畜産分野では、鶏のと畜や産卵鶏の世話、ベーコンの製造に取り組みました。私は栽培コースでしたので畜産の授業は多くなかったのですが、命の大切さや食料生産の大変さを知り、食べものを大切にしないといけないと強く感じました。

森林分野では、さくらプロジェクトの取り組みが印象に残っています。さくらプロジェクトは、日本一早い桜の名

所を大島に作ろうという取り組みです。夢待桜という伊豆大島で作出された早咲きの品種を、大島高校の生徒の手で増やし校内に植栽しています。今年で3年目を迎え、接ぎ木で繁殖させた苗が、現在では１００本以上育っています。十年後、二十年後きっと観光名所になっていると信じています。

　3年生の夏に総合実習の一環で参加したインターンシップでは山梨県の果樹農家でお世話になりました。大島とは異なる地域の農業の姿と生産農家の大変さを知ることができました。夏の暑い中でも作業を進めることは過酷でしたが、それが経営の改善に繋がると知り一生懸命働きました。また、モモをジャムに加工したり、東京で直売するなど農作物に付加価値をつける工夫を学びました。

　私の住む伊豆大島は、昨年の土砂災害で大きな被害を受けました。高校農場も被害を受けましたが、懸命に立て直して秋の販売会を行いました。災害直後でしたがとても多くの人が来てくださり島を活気づけることができました。多くの人たちに期待されていることを知り、私たちも自信がつき、勇気をもらうことができました。

　農業生産は、大変なこともありますが、自分たちが育てた作物を通じて、多くの人に喜びを届けることができます。育てた私たちも多くの人たちに喜んでもらうと、それ以上に嬉しくなり、大いにやりがいを感じます。3年間の農林科での学びで私はそれを実感することができました。卒業後は進学し、農業についてより深く学んでいく予定です。農業の6次産業化を実践できる能力を高め、将来は作ることの喜びを仕事にできる生産者になりたいと考えています。

# 商いと人とのつながり

東京都立第一商業高等学校　二年
石田麻奈美

　夏休みに入ってまもなく、インターンシップをさせてもらい、八月になってから、長野で販売実践を行いました。今となっては良い思い出になっていますが、振り返ってみるとかなり大変だったと感じます。

　まず七月下旬、インターンシップは、私ともう一人、計二人で二日間、また違う二人で二日間、「シェ・リュイ」というカフェを兼ねたパン屋で行いました。朝出勤して上の階で作っているパンが小型のエレベーターでお店に届き、店内に並べる作業から始まります。従業員さん達は、慣れた手つきでパンを運んでいましたがパンが入っている箱は重たく、軽々と運ぶ従業員さん達はすごいと思いました。開店してからもパンが次々とエレベーターから降りてきて、

店内がパンの香りでいっぱいになり、とても幸せになりました。また、お客様を待たせる事の無いよう従業員さん達一人一人の行動が機敏でした。私も社会に出る為に見習うと共に、尊敬します。

そして、このイベントの為に力を注いだと言っても、過言ではありません。八月中旬、第二回全国高校生合同販売「デパートゆにっと」に参加してきました。私を含め三人の生徒と一人の先生で行きました。自分達の販売する商品がどうしたら売れるのだろうか、販売実践の手伝いをしてくれた友達の意見を凝縮したものが「代官山ラスク」でした。これは、インターンシップを行った「シェ・リュイ」で売られているラスクです。そのラスクに学校名を印刷したシールを貼ることでお客様がそのシールを見ようと立ち止まってくれると考えました。ほかにも、商品を並べるトレーの色を味の種類別に変えたり、星型のカードでポップを作ったりしました。このようにお客様に商品を買ってもらえるような工夫が必要だということを学びました。長野には三泊四日で泊まりがけで、一日目は準備のみ行いました。販売したのは次の日からの三日間でした。準備の段階では何もかもが初めてでこの会場で売るという楽しみと、無事に売れるかという不安が入り混じりながらも、何度もミーティングを繰り返して二日目からの販売に備えました。二日目、ついに販売がスタートしました。販売初日からたくさんのお客様が来てくれました。八時間という今まで経験した事の無い長時間の中、一生懸命接客をしました。そこで気づいた事はほとんどの学校が試食を出していた事です。試食の周りには商品の説明を聞いているお客様、商品を買うか迷っているお客様など、人で溢れていました。しかし人が集まっているという事は接客が上手いという意味でもあります。いかにお客様を引きつける事が出来るか、商品を売る私達にも工夫が必要だと分かりました。二日目。一日目よりも「いらっしゃいませ」という声が大きくなっていました。その日の午後、自分達の商品が完売。しかし私達の商品をわざわざ買いに来てくれたお客様もいました。申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。しかし商品を買ってくれたお客様の嬉しそうな顔に自分達まで嬉しくなりました。三日目。無事に商品を完売することが出来た私達は、他校の商品をお手伝いとして販売する事になり販売終了の時間になるまで頑張りました。長野に行ったその日から、長野商業高校の生徒さんの皆さんが本当に色々な事をしてくれて個人で販売しているというより、参加した学校みんなで一緒に販売するという雰囲気作りを常に気にかけて行動していました。

普段は自分が客としてお店に行く為、裏ではどんな事をしているのかなんて全く気にしていませんでした。今回、店員として販売実践を行って、お店で働いている人達の大変さを身を以て感じ取る事が出来ました。インターンシップや販売実践、商品製作は、実際に働いたり、ものを作ったりするという実体験で大変でしたが、マーケティングで学習してい

る「顧客満足」を大切にすると共に、「従業員満足」も体験する事が出来ました。また社会に出るときにどんな職種が自分に合っているのだろうか等、課題も芽生えました。

商いの大変さをこの夏、知ることが出来ましたが、他にも知る事が出来たものがあります。それは「人と人とのつながり」です。

今回の活動は、「ＦＣＨラスクィングズ」というチーム一丸となって活動してきました。どんなに辛い仕事があったとしても、決して一人に任せるのではなくみんなで解決したり、お互いの意見の良い所を尊重して相乗効果を発揮したりと、様々な体験をすることが出来ました。「デパートゆにっと」でお世話になった長野商業高校の皆さん、先生方、一緒に販売を行っていた学校の皆さん、また、チームの仲間。本当にたくさんの人が協力し合っているのです。商いには人とのつながりがあるのだと知る事が出来ました。

# 夢への道のり

東京都立農芸高等学校　三年
**田中愛里**

私は、幼い頃から植物が好きでした。道端に生えている見知らぬ花を見つけては、母になんという名前の花なのかを尋ねました。自宅の花壇や庭にも、チューリップや薔薇、ユリに水仙、クローバーなどが植わっており、よくそれらで遊んだものです。また私は、肉眼で見ることのできない小さなものを、顕微鏡を通して見ることも好きでした。私の目には見えないだけで、確かに存在している何かを見つけることや見ることは、とても楽しかったからです。そして私は小学生のとき、菌が活躍するある作品に出会いました。その作品を読んで私は、菌類、細菌類といった微生物に強く興味を持ちました。目に見えない小さな生き物たちが、目に見える形で私たちの生活に大きな影響を与えているのだと、感動もしました。

それから私は中学生になり、進路を決めるときが来ました。私は初め、普通科の高校を考えていました。しかし、私が植物や微生物に興味を持っているということを、担任の先生に話したところ、「それなら、一度農業系の大学のオープンキャンパスに行ってみるといい。」と、大学の見学に行くことを勧められました。この一言は、私の進路、将来の夢に大きな影響を与えたので

す。この一言がなければ、きっと私は今通っている高校にはおらず、将来への道も変わっていたことでしょう。私は大学のオープンキャンパスに行き、微生物を取り扱っている学部を見学して、バイオテクノロジーにも関心が向きました。今まで微生物にだけ目を向けていましたが、その微生物を利用した技術、バイオテクノロジーこそ、私のやりたいことではないかと思いました。そこまで考えて私は、地元にある農業系高校への進学も視野に入れました。その高校は、授業に植物バイオテクノロジーがあるからです。私の好きな植物と、関心のあるバイオテクノロジーについて学ぶことができるのは、とても魅力的でした。また、そこの高校からは私が見学に行った大学へ進学している生徒も毎年数名ずついるという話も聞き、ますます私の心はこの高校へと傾いていきました。しかし、専門科目の授業が入ってくる分、普通科の学校と比べて普通科目の授業が減るので一般試験を受けるのは厳しく、推薦を受ける人がほとんどだということを聞きました。そして私の目指す学部を推薦で受けるなら、評定平均が4・7はあった方が良いということも言われました。この言葉は、本当にこの高校を選ぶべきかと私を不安にさせ、何度も悩ませました。それでも、「今の私には目標がある上、自分の好きなことについての勉強ならきっと3年間頑張れる」と思い、農業系の高校を選びました。入学したばかりの頃は、本当に大変でした。植物バイオテクノロジーはもちろん、野菜や果樹、草花についての専門的知識は0からのスタートでしたから、分からないことも多ければ覚えることも多く、これから3年間、本当に大丈夫だろうかと何度も思いました。しかし、その度に私は目標を心に浮かべ、自分を励ましました。友人たちにも何度も支えられました。学校生活にも慣れてきた頃、私はあることに気が付きました。それは、勉強を「させられている」のではなく、「自ら進んでやっている」ということです。中学生の頃までは、正直勉強はあまり好きではありませんでした。それはきっと、その当時の私には具体的な目標も無く、勉強もさせられているという風にしか感じていなかったからでしょう。しかし、目標を持って高校に入った私は勉強に対する姿勢が変わり、気が付けば、学ぶことが楽しいと感じ自ら進んで勉強するようになっていました。好きなことについて学ぶのはもちろん楽しいですし、そうして自分の知識が増えていくことは、もっと楽しいと感じます。実習では、座学からは学べないことを沢山体験し、人として大きく逞しく成長したと実感しています。

3年生になって、再び進路を決めるときが来ました。私は、生物や植物バイオテクノロジーの授業を通して、やはり自分の進む道は、中学3年生の頃と変わらないことを再確認しました。世界にはまだまだ色んな微生物がいて、私たちの知らない力を持っているに違いない。それを見つけることは、調べることは、私にとってとてもわくわくすること。私は、微生物の身体の構造や機能、メカニズムを知り、それを環境あるいは人に役立てられるような研究をしたい。これが私の今まで目標としてきたことへの思いです。

大学に入学したら、知識をさらに深め、微生物の可能性に挑戦していきたいです。そしていずれは日本から出て、世界を見てきたいと思います。どんな技術を持って、どのような

研究をしているのかを、実際に見て、話を聞いてみたいです。また、世界へ出て様々な人と交流を深めることで人間的に成長し、広い視野を持った研究者になりたいと思います。

# 酪農体験で知る

東京都立農産高等学校　三年
石田　凌

高校二年の夏、私は初めて北海道を訪れました。酪農とはどういうものなのか。働くとはどういうことなのかを知りたい。そして、学校の授業の中では学べない社会勉強がしたく北海道酪農体験に参加しました。私はこの酪農体験を通して大切なことを学びました。それは、難しいことでも酪農に関する専門的なことでもありませんでした。

広大な自然に包まれ、のどかで、時がゆっくりと流れていく。そんな風景の中で牛と過ごす自分を想像すると、学習しに行くとは分かってはいても、初めての北海道、どこか旅行気分が抜けず、胸の高鳴りが止まりませんでした。しかし、実際に作業に取り掛かると、現実は想像していたものとは違いました。

酪農体験が始まって間もないうちは牛舎にずらっと並ぶ、自分よりも大きな牛たちに圧倒されていました。全身に響き渡る鳴き声、力強く蹴り上げる脚に、恐怖を感じるほどでした。

すぐに任されたのが牛舎の掃除です。通路に散らばった糞をスコップで落とす、餌の食べ残しをほうきで集める、という単純作業でした。「どちらの道具も日頃から実習で使っているから大丈夫」「この作業で農家さんに褒めてもらえるかもしれない」そんな思いを胸に作業に取り掛かりました。自信満々でした。しかし、言われた言葉は思いもよらぬ、お叱りの言葉。「スコップで隅々まで汚れが取れていない」と言われてしまったのです。一度くらいは仕方ない、そう自分に言い聞かせて続けました。しばらくして農家さんが戻ると「君は何度同じことを言ったら分かるんだ」と言いながら私の手からスコップを取り上げ、掃除したところを全てやり直されてしまいました。私はしばらくの間、その場に立っていることしかできませんでした。

ほうきを使った、食べ残しの掃除では挽回しようと積極的に取り組みました。いくら注意を受けても返事だけはしっかりしようと決め、「はいっ」と大きな声でハッキリと答えることはやめませんでした。すると、「君は返事しかできないのか」とまたお叱り。私はすっかり自信を無くすと共に、自分のために農産高校の生徒はほうきの一本もまともに使えないのかと思われたくない、応援してくれている家族や先生に申し訳ないという思いが込み上げ、考えれば考

えるほど失敗の繰り返しでした。

子牛の牛舎の掃除では、「掃除を終えたところは必ず鍵をかけること」と言われていました。ところが掃除の後に行うわら敷きに気を取られていた私は、すっかり鍵をかけ忘れ、その場から去ってしまったのです。夜中、私が寝ている間に逃げた子牛を二人掛かりで連れ戻したと聞いたときには、自分のしてしまったことの重大さに気づくと同時に、子牛が無事で良かったとほっとし、力が抜けてしまいました。

今、思い返すと三分に一度は叱られていたと思います。ホームシックになったことは言うまでもありません。

「はい、すみません。気をつけます。」と繰り返す私に「はい、気を付けますってあんた、何度同じ失敗をすれば気が済むんだい。出来もしないくせに分かったようなふりをするんじゃないよ。出来ないことを上司に言われて、はい出来ますだなんて言っていたら信用なくなるんだよ。」社会の厳しさを痛感した時でありました。真面目であることと、仕事が出来ることは、イコールではなかったのです。

その晩「ただいま帰りました」と肩を落として家へ上がる私に、「そんな蚊の鳴くような声でどうするの、元気に一言、ただいまでいいんだよ。」とまたしてもおふくろさんのお叱り。しかし、仕事中とはまるで違う人の様でした。食卓に着くと、仕事も忙しい中いつ作ったのかと思うほど沢山の料理がテーブル一杯に広がっていました。私は有り難さと申し訳なさが入り交じり、涙で料理が見えなくなりました。

仕事はもちろんのこと、家事も手際のよいおふくろさんの背中は「仕事の失敗を家の中まで持ち込むな」と語っているようでした。仕事を上手くこなす人はメリハリをきちんと付けていたのです。

酪農家さんは毎日、高品質な牛乳を作るために、ハードなスケジュールで重労働をこなしていました。仕事には生活がかかっています。もしも牛が病気にかかったり、良質な牛乳が出来なければ収入は下がることになります。生きることに直結しているのです。これは私が目指す造園の仕事でも同じです。たくさんの仕事をもらい、立派な庭を造るためには、樹木や石に関する知識と技術を身につけ経験を積む必要があります。お客さまが望んだ通りの庭を造れなくてはいけないのです。どんな仕事であれ同じだと思います。

私は、この酪農体験を通して、「仕事」の大変さと社会の厳しさを学びました。これは造園の道でも必要な、仕事に対する姿勢とひたむきさでした。仕事に大きい小さいは無いのです。基礎、基本を大切にし、仕事を任されるような一人前の職人になります。そして、安らぎと楽しみがあり、みんなに愛される、庭造りを私は目指します。

# 動物と生きる

東京都立瑞穂農芸高等学校　一年
太田しゅう

中学校三年生の時。仲のいい友達がいきなり肉を食べなくなりました。理由をたずねると、「牛のと畜を見てしまって食べれなくなったの。牛がかわいそうで…。」と答えが返ってきました。それから彼女は給食で魚や肉は一切食べず、高校生になった今でもこのような菜食生活を続けているそうです。

私は今、畜産科のある高校に通っています。新しい友達もできて、たくさんの動物に囲まれて、とても充実した日々を過ごしています。しかし、高校で動物のことを知るにつれ、「動物と生きること」について考えることが増えました。

今年の夏、私はある観光牧場で五泊六日の酪農実習を行いました。一日目の朝、つなぎ飼いしていた一頭の牛が夏バテしてしまい、立てなくなっていました。息を荒げ、よだれをひっきりなしに出している姿をお客さんに見せることはできない、と判断した牧場の場長さんとスタッフさんが立てなくなった牛にロープをつけ大型機械で引っ張り、人目のつかない第二牛舎に運びました。この第二牛舎にはすでに一頭、立てなくなった牛が入っていました。第二牛舎に入れられた二頭の牛は立てないため水を飲むことすらできません。牛にとって水は欠かせないものなので、夜八時頃に私と他の実習生とスタッフさんとで何度か水をあげに行きました。水の入ったバケツを私が牛の口元にもっていくと、牛は頭をバケツにつっこんでぐびぐびと勢いよく水を飲んでいました。「このまま水を飲んで元気になって、お客さんの前に出せるようになったらいいね。」と私と他の実習生で話したりしてました。

けれども私達の願いは叶いませんでした。

実習四日目の夕方、場長さんに「第二牛舎に集合して。」と言われ、第二牛舎にかけつけました。第二牛舎の前に牧場の名前がかかれた大きなトラックが止まっていて、私はとても嫌な予感がしました。一人の実習生が恐る恐るスタッフさんにたずねました。「あの二頭の牛、出荷しちゃうんですか。」「うん。もう立てる見込みがないからね。今日の内に出荷することになったんだよ。」私の予感は的中していました。それから、私達実習生とたくさんのスタッフさんとで、牛の足にロープを巻いて引っ張り、トラックに乗せました。牛達は一度も抵抗しませんでした。

次の日、私はと畜場から帰ってきたスタッフさんに「二頭とも肉の部分を取って、真っ二つになっていた。」という話を聞きました。話を聞いて、「動物を生かすのも、殺すのも結局は人間次第なんだな。」と強く感じました。

牧場実習が終わった後、牛について調べてみました。そこで知ったのは牛の生物学的な寿命は約二十年とされているのに対し、家畜としての牛たちの

平均寿命はわずか五～六年だということです。

人間の生活は様々な動物の犠牲の上で成り立っています。牛や豚、馬、鶏、羊…。これらの動物は食肉や革製品として人間に利用されます。また、ウサギやモルモット、ネズミなどの動物は人間のための薬の実験や、人間の病気を解明するための実験などに利用されます。動物の「死」なくして、人間が安心、安全な生活を送るのは厳しいと私は思います。もし、食肉がなかったら人間は健康的な生活を送るのが難しくなります。もし、実験動物がいなくなったら、シャンプーや化粧水を使っただけで肌がかぶれたり、赤くなったりするかもしれません。

どんな動物も人間の都合で生かされたり、命を奪われたりします。家族の一員として犬や猫を飼う人もいれば、「じゃまだから。」と犬や猫を捨てる人もいます。食文化の一つとして犬や猫を食べる人もいます。私達、人間はこの事実に向き合い、考えることが大切なのではないでしょうか。

世の中にはたくさんの考えを持つ人がいます。初めに紹介した友達のように動物の肉を嫌い、野菜だけ食べて生活する人もいます。私のように肉や魚も野菜も食べて生活する人もいます。いずれの生活にしても、私達は動物に感謝することを忘れてはいけないと思います。また、人間が生きるために動物を利用している事実に向き合い、学び、考えることも忘れてはいけません。これは人間の犠牲となった動物のためにも、自分のためにもつながっていくのだと思います。

私もこれから、たくさんの命に向き合う機会が増えると思います。たくさんの「死」にも出会うと思います。動物を生かすこともあると思います。動物の命を奪うこともあると思います。たくさんの事に当たっても、動物と向き合うことは忘れずにいたいです。

## 専修学校の部　優秀賞

# 回り道をすること

青山製図専門学校　一年
横堀圭亮

２０１４年1月末日、私は3年間勤めていた職場を退職した。そして今現在、建築という専門教科を学ぶために、再び学校に通っている。

周囲とは、違う進み方をすることもあり、当然批判や反対もあった。私自身も先が見えない不安があった。しかしなぜ、仕事を辞めて新しい道に進むようになったのか、将来について、どのような想いを持っているのか、また、私自身が思う働くことの意義や学ぶことの意義について述べていきたいと思う。

私は高校を卒業した後、今現在学んでいる建築の分野とは全く異なる経済系の大学に進学した。その進路を選択した理由については、特別な理由もなく、ただ単に自分の学力に合っ

ていたからとか、実家から通えるからとかそういうごく単純な理由だったと思われる。

今思えば、大学に進学した当時は、将来について深く考えるようなことはなかった。勿論、漠然とは就いてみたい職業や、将来像について考えることはあった。しかしながら、それが本当にやりたいことだったかは、素直に「はい」とは言えなかったかもしれない。

大学生活についても、あまり大きな声では言えないが、勉学に励むことよりも、サークル活動や友人達との交流に精を出していた方だった。将来のことよりも、その時の今に夢中であった。

当時のことを振り返ると、自身の将来のことを、もっと深く考えるべきだったかもしれない。それでも、大学で出会えた先輩や友人、サークル活動を通して関わってきた人々の考えや価値観は、自分の人生観に大きな変化をもたらしてくれた。

また、大学3年、4年生時の就職活動は、自身の将来をはっきりさせる一つの契機となった。やはりというべきか、就職活動は思うように進まなかった。社会には、数多くの職種や企業が存在し、企業研究や会社説明会に参加することで、興味がわく仕事や企業も見つけることができた。ただ、それが本当にやりたいことかは、自分自身、曖昧な回答だった。その気持ちが見透かされていたのか、面接の結果は、散々なものばかりで、迷いや不安が募っていた。

私は、この時初めて自分の将来と、これまでの自分の人生を見つめ直していた。私が本当にやりたいこと、本当に興味のわくもの、そして挑戦してみたいこと。そして、浮かんできた一つの答えが、モノづくりと建築という世界だった。

なぜその答えに至ったのか、正直なところ、小さい時から建築の世界に触れてきた訳ではないし、モノづくりが得意かと言われれば、それも定かではない。ただ、いつからか美術館や図書館が私の好きな場所の一つであったこと、人が集まる空間が好きだったこと、そんな興味を持っていたことに改めて気付いてからは、さらに建築や空間づくりの世界を知りたいと思うようになっていた。そして、自身の手で、建築物や空間を設計してみたいという思いに至った。

それからは、建築の道に進むことを念頭に置きながら、大学卒業後について考えていた。大学は、建築とは縁のない学問を専攻していたため、再度学び直す必要があると考えた。しかし、現実的な問題は勿論のこと、社会を一度経験することで、また違った価値観が生まれるかもしれないと思い、卒業後は就職することに決めた。

この結論に至った時、建築の世界に進むには少し遅すぎないか、という不安はあった。それでも、大学で出会った人達は、常に挑戦し、失敗を恐れない人や、知らない世界に果敢に飛

び込む人達ばかりであった。その出会いを経験できたことが、私の気持ちを後押しする大きなきっかけになったと思う。

大学を卒業後、私は前段の通り、会社に3間年勤めた。社会の荒波に揉まれるという表現は少し大袈裟かもしれないが、やはり楽しいことばかりではなく、辛くて大変なことも多く経験した。ただ、その経験を通じて得たものは、忍耐力や我慢強さといった精神的なこともそうであるが、それ以上に、一つの仕事をやり遂げた達成感ややりがいは大学生活で得ることのできない貴重な経験であったと思う。そういった苦しみと、乗り越えた先にある充実感を、身をもって経験してきたことは、必然的に今現在の私の財産となっている。

ただ、やはり建築の世界に飛び込みたいという気持ちは、3年間捨てきれなかった。続けていた仕事を辞めるとなった時は、最後の最後まで悩んだ。しかし、中途半端な気持ちのまま仕事を続け、挑戦しなかったことをずっと悔やむことより、自分の気持ちに正直でいたい、そしてこれまで以上に困難な状況となっても、自分自身で決断したことに後悔はないと考え抜き、私は仕事を辞めた。

今はまだ、建築という場所のスタートラインに立ったばかりである。今後どのようなことが、待ち受けているかは、全くわからない。不安なことを数えればキリはないが、それでも、自分自身が、どのようなモノを作り出していけるのか、そしてどのような人達と出合っていけるのか、将来に対して怖さよりも期待してしまっている自分がいる。

4年間通った大学の日々、そして一度社会を経験できたことで、建築の分野では得ることのできない価値観や人生観を持つことができた。私が、これまで経験してきたことを武器に、これからの建築の世界に臆することなく挑戦していきたい。

## 専修学校の部　佳作

# 専門教科を通して学んだこと

青山製図専門学校　一年
三木遼太

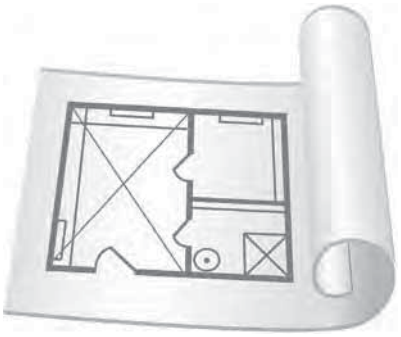
青山製図専門学校に通い始めて約半年が経った。

私は、そもそも海外生活が長かったこともあり、普通の人とは違う人生を歩んできたと思う。小学校・中学校の時には、インターナショナルスクールに通い、高校では寮生活、そして、予備校や大学等、紆余曲折を経て現在に至っている。なかなか日本の生活に馴染めない日々も続いたし、正直、将来に悩んだ時期もある。そんな時、ボランティア活動やバイト、セミナーへの参加等を通じ痛感したのは、自分には社会で生きていく上で、何のスキルもないということであった。やはり、手に職を付けたいと思い、専門学校に入る決意をした。

専門学校ということで不安を感じていたことが三つある。年齢差がある同級生と上手くやっていけるのか、全く予備知識もない技術スキルを含むカリキュラムについていけるの

か、建築という専門分野に入ることで、将来の選択肢がずいぶん限られてくるのではないか、という点である。

入学して最初に感じたのは、思ったより幅広い年齢層がいることであった。圧倒的に高卒者が多かったが、社会人や留学生等、年齢差だけでなくバックボーンも異なる人が集まっている。若干、ジェネレーションギャップを感じつつも、一緒にいると新鮮な反応があり、良い刺激を受け取っている。又、年齢差から来る遠慮からか、互いにいい距離を保ちつつ、自然と役割分担・協力体勢ができるように感じている。先生方との関係性も含めて、実社会でのコミュニケーション力にも繋がっていると思う。



専門学校が高校や大学と違うのは、何よりもカリキュラムに力を入れている点ではないだろうか。二年間という短い期間に修得すべきものが何と多いことか。授業は単に講義だけではなく、実技やパソコンスキルを上手に取り入れて、飽きさせない。元来、不器用な私は、特に実技面を初めは不安に思い、四苦八苦しながら課題をこなしていった。しかしながら、毎日の積み重ねが功を奏したのか、今では授業スピードにも慣れ、ペース配分もできるようになってきている。何よりも、一つずつ作品ができていくという達成感が得られるのが嬉しい。もちろん力不足の面は多々あるが、それらの反省点を次の課題に生かせるようにしたい。

専門学校に通い始めてから自分が変わったと大きく感じたことがある。それは、意識的に建築物を見る機会が増えたことだ。以前は変わった建物を見ても、興味がなく通り過ぎてしまっていた。しかし、現在は特徴的な建物等を自主的に見に行くようにし、写真に残して参考資料として活用している。展示会や講演会などにも足を運ぶようになった。

例えば作品展では、他の学生が作った作品を見ることで、少しでも自分のアイデアに生かそうと思っている。ここ最近では、ガウディ展に行ってきた。ガウディ自筆のスケッチや図面、大型の建築模型や彼がデザインした家具を含む貴重な作品が出品されており、それ以外にもプロジェクション・マッピングによる演出、床への装飾など展示空間が大胆に展開されていた。自然を師と仰いだガウディの生き様を感じさせる内容であった。また、この夏には同級の友人達と四国を周る旅行をした。直島のベネッセハウスや地中美術館、安藤忠雄ミュージアム、更に、伊藤豊雄建築ミュージアム、松山の国重要文化財である萬翠荘、そして、広島の厳島神社や原爆ドーム、平和記念公園等、多くの建築物を見てきた。単なる観光旅行ではなく、目的をもって旅をするという初めての体験だった。更に、赤坂迎賓館の内部見学にも行ってきた。こういった行動は、以前の自分では考えられなかった。少しずつではあるが、成長したと感じる。

専門教科を学ぶということで、将来の幅が狭まると思っていたが、多方面に興味と可能性が広がってきたようにも感じられる。これから得ていく知識や技術を十分に蓄積し、自分のものとし、今後の将来設計に繋げていきたいと考えている。

# 学習に対する心構え

青山製図専門学校　一年
宮島真美子

私は、専門学校に通っている。二級建築士の資格を取得するためだ。

学校では製図を描いたり、模型を作ったり、さまざまな課題に取り組む。どれもはじめてのことなので恐ろしく時間がかかる。時間をかけた分だけ出来上がりが見事なら納得するが、お粗末なものばかりでがっかりする。それでもこれが現実だ。今の自分の実力だ。ここから始めるより仕方がない。あと一年半でどこまで自分を磨けるか。それが今の私の課題だ。

これから学習する上で心がけたいことが三つある。一つは自分に囚われないこと。二つめは今の自分を大切にすること、そして目的意識を持つことだ。

囚われないというのは、自分に執着せず全体を見るということ。自分のやっていることが滑稽でないか、一つのことに囚われて誤った方向に努力していないか、一日五分でもいいから問いかけたい。客観的になることは意識しないと難しい。

「どこから見てもいいよ」と言われているのに、わざわざ小さな穴を覗きこんでそこから見ようとしているようなものだから。目を凝らせば凝らすほど実体から遠ざかってしまう。そういう悪循環に陥らないようにしたい。

ではどうすればいいのか。私は、仲間の力を借りようと思っている。私には二十七人のクラスメイトがいて、いつも同じ課題に取り組んでいる。ところが、出来上がるものは全く違う。発想の違いと表現の違いでこうも変わるものかと毎回驚く。二十七人の視点が私を豊かにしてくれる。独学では考えられない柔軟性だ。仲間から学ぶことは山ほどある。仲間は教壇に立たない教師だ。とても感謝している。

次に心がけたいこと、それは今の自分を大切にするということ。

どうあがいても今の自分には今の自分の見方しかできない現実があるからだ。

例えば休日に建物の見学に行く。窓の大きさが良いな、階段の手すりが良いなと目に付いたところをスケッチする。感動して帰路につく。帰りがけに立ち寄った図書館で建築家の書いた本に出会う。今見てきたばかりの建物について書かれている。読めば読むほど愕然とする。あまりに見ているところが違うのだ。いったい私は何を見てきたのだろうかと青くなる。まるで、

「ああ美味しかった」

とハンバーグを食べ終えたときのようだ。ハンバーグの色、艶、匂いは思い浮かべることができるのに、さてどんな材料が入っていたのか、味付けは何であったのか、さっぱり思い出せない。要するに作り方がこれっぽっちも分からないのだ。格好にばかり気をとられ肝心のところを見ていない。これで見学に行ったと言えるのだろうか。それでも懲りずに食べ歩くしかない。和食洋食を問わず、世の中にあるいろんな味を体験する。今

おいしいと感じるものを大切にするしかない。そして、その積み重ねで感覚を磨き、舌を肥やす。味わうだけの立場から創り出す立場になるには何が必要かを考えながら。

最後に目的意識を持つということ。一見同じ目的に向かっているように見えるクラスメイトだが、実際は別々な方向を見ている。やりたいことも働き方も違うだろう。資格を取ることは先決だとしても、それからの生き方は千差万別。だから自分の目的地を常に意識しておきたい。意識するのとしないのとではゆくゆく大きな差になると思う。修正は早いほうがいい。

残りの学生生活で、どれだけ自分を磨けるか、それはこの心構えにかかっていると思う。

今の自分に囚われず、今の自分を大切にし、そして目的意識を持って勉学に励みたい。

# 将来の夢

中央工学校　一年
藤原誠也

父が経営する金型の会社の後を継ぎ、父と一緒の仕事をすること。これが私の将来の夢です。そして仕事を通して、人々の役にたつことで、大きく成長したいと考えています。

どんな仕事にも、やりがいや意味があり、それに立ち向かうことで成長していけると思いますが、興味のある仕事に取り組めたら、より大きく成長でき、社会にも貢献できるのではないかと思いました。

私の家の会社は祖父が創業し、今は父が経営している小さい会社ですが、幼いころから祖父と父が仕事をしている姿を見て私はとてもかっこよく思えました。私は高校三年になるまでは父の後を継ぐなんて思ってもいませんでしたが、自然とやらないといけないのだと自分の中で思い始めました。

先日、祖父が急に亡くなりました。亡くなる直前まで元気だったはずなのに本当に突然の死で信じられませんでした。しかし、祖父には会社を継ぐということを伝えてあったので安心して天国へ行くことができたのではないかと思います。この祖父の突然の死がきっかけで私は祖父のためにもしっかり頑張らなくてはならないと思うようになりました。

働くということはただお金を稼ぐためだけではないと思い

ます。たしかにお金がないと私たちは生活していけません。しかし今、働いている人たちでお金儲けだけしようとしている人は少ないと思います。たぶんみんな「だれかの役に立ちたい」と思い、仕事をしているのではないでしょうか。昔、私は仕事というのは自分や自分の家族のためにするものだと思っていました。しかし、今は人のためにする仕事があると知りました。

今、学校で学習している製図の授業や工業系の授業も将来、人の役に立つ仕事に結びつくということを感じるようになりました。私は金型製造に関する仕事をやっていきたいと思っていますが、金型を造ることによっていろいろな製品が作られ、世界中に広がっていくことで誰かのために役立つと思います。

仕事をするということは決して楽なものではなく、みんなそれぞれが苦労してお金を稼いでいると思います。私もそういう人たちのように真面目に働いていきたいと思います。

これから専門的な知識をしっかりと習得しなければならないし、身に付けた知識を応用できることも大事だと思います。

さらに、製品を開発することは、一人では出来ません。たくさんの人々がアイデアを出し合い、協調性も必要です。

学校の中で、人とのコミュニケーションを大事にすることも、将来の夢を達成するには重要なことだと思っています。

夢をかなえるには、金型に関することについて多くのことを学ばなければならず、さらに独創的な発想も必要なことから、その道はとても大変かもしれません。

しかし、それだけに達成したときの喜びも大きいと思うので、金型を造って、人々の生活を豊かにする製品を製造できるよう努力し、その道に向かって歩み続けたいと思います。

# 私の職業観

日本工学院八王子専門学校　二年
加藤理恵

私の職業観は母親に大きく影響されていると感じています。母は看護師です。幼い頃は母に憧れて、自分も将来看護師になり一緒に働くのだ、と言っていた時期もありました。

今現在の私が看護師という仕事に対して思っていることは、こんなに大変な仕事は他にないだろう、とういうことです。仕事と名のつくものに楽なものはありません。けれども、〝看護〟と名のつく仕事の大変さは、他の仕事よりも身近で見続けた所為かもしれませんが、私にとって至極つらい仕事の様に思えます。少なくとも、看護師の子である私は、看護師の親を持つが故につらい経験がたくさんあるのです。必要とされない時間など一瞬もないのが看護という仕事で、たとえ休みの日であっても母は仕事場へ連絡をしない日はないように思います。何時何処に居ても、私の母は看護師なのです。たくさんしたつらい経験というのはほとんど、母親にう

まく甘えることができなかった幼少期の経験です。忙しい、忙しいが口癖のようになっていた母ですから、家での〝仕事〟を邪魔してはいけなかったのです。夕飯のリクエストを訊かれそれに答えても時間がないという理由で断られたことが多くあり、そのうちに母が作りやすければ何でもいいと答えるようになりました。そうなると考えるのがまた面倒だと、母は愚痴をこぼすのです。

私が看護の仕事に対して感じている大変さは、仕事をしている人のその周りに寄る部分が多いように思います。もちろんこれは看護の仕事に就いている人に限った話ではないことも理解しています。仕事というのは周りの理解と協力があってはじめて成るものなのだと思います。

何度か母に、何故忙しい、大変だと言いながら看護の仕事を続けるのか、と尋ねたことがあります。それでもこの仕事が好きなのだと、いつも決まった答えが返ってきました。母の仕事を恨んだことがないといえば嘘になりますが、それでも一時的であれ私が看護師の仕事に就きたいと思ったのは、人が好きで人のために働く母を心底尊敬していたからです。その尊敬の念がなければ、看護師の母を持つ子としての精神的重圧に耐えきれなかったと思います。

神様から人に与えられた唯一の平等は〝時間〟だと、母は度々口にします。与えられた時間の中で何をしてどう過ごすのか、人の人生の〝価値〟はそこで決まるのだと私は思います。また、母からは看護師は幼い頃からの夢で、それを叶え続けられていることはとても幸せなことだ、という話も聞きました。やりたいことを仕事にするということは難しいことです。さまざまな理由で夢を諦めなければならない人は大勢います。そんな中で夢を叶え、やりたいことを仕事にし、それを誇りとしている母は、やはりかっこいいのです。これは幼い頃からずっと変わりありません。誇りに思える仕事を勝ち取り、それを心底好きだと言える人生は、とても価値ある時間であるのだろうと思います。それが、わたしの職業観です。

**表彰式　講評**

# 平成 26 年度　作文コンクール　応募校一覧（応募数・入選数）

（中学校の部）

| 番号 | 区・市名 | 学校名 | 応募数 | 入選数 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 中央区 | 晴海中学校 | 1 | 1 |
| 2 | 新宿区 | 牛込第二中学校 | 2 | |
| 3 | | 西早稲田中学校 | 2 | 1 |
| 4 | 墨田区 | 両国中学校 | 10 | |
| 5 | | 吾嬬立花中学校 | 1 | 1 |
| 6 | 品川区 | 日野中学校 | 10 | |
| 7 | | 荏原第一中学校 | 1 | |
| 8 | | 荏原平塚中学校 | 2 | 1 |
| 9 | 大田区 | 大森第一中学校 | 1 | 1 |
| 10 | | 大森第六中学校 | 5 | 2 |
| 11 | 世田谷区 | 松沢中学校 | 4 | |
| 12 | | 用賀中学校 | 4 | |
| 13 | | 喜多見中学校 | 9 | 2 |
| 14 | 中野区 | 第七中学校 | 3 | 2 |
| 15 | | 中野中学校 | 5 | |
| 16 | 北区 | 王子桜中学校 | 1 | |
| 17 | | 赤羽岩淵中学校 | 1 | 1 |
| 18 | 荒川区 | 第七中学校 | 1 | |
| 19 | 足立区 | 第六中学校 | 10 | |
| 20 | | 第十一中学校 | 1 | |
| 21 | | 渕江中学校 | 10 | |
| 22 | | 千寿青葉中学校 | 1 | |
| 23 | 葛飾区 | 堀切中学校 | 10 | 1 |
| 24 | | 一之台中学校 | 10 | 1 |
| 25 | 調布市 | 第六中学校 | 10 | |
| 26 | 羽村市 | 羽村第三中学校 | 7 | |
| 27 | 都立 | 大泉高附属中学校 | 6 | 5 |
| 28 | 私立 | 愛国中学校 | 6 | |
| 計 | | | 134 | 19 |

（高等学校・専修学校の部）

| 番号 | 学校名 | 応募数 | 入選数 |
|---|---|---|---|
| 1 | 都立第一商業高等学校 | 3 | 1 |
| 2 | 都立園芸高等学校 | 2 | |
| 3 | 都立中野工業高等学校 | 1 | |
| 4 | 都立農芸高等学校 | 2 | 1 |
| 5 | 都立赤羽商業高等学校 | 4 | |
| 6 | 都立北豊島工業高等学校 | 1 | |
| 7 | 都立忍岡高等学校 | 10 | |
| 8 | 都立荒川工業高等学校 | 6 | |
| 9 | 都立農産高等学校 | 10 | 2 |
| 10 | 都立橘高等学校 | 8 | |
| 11 | 都立瑞穂農芸高等学校 | 7 | 2 |
| 12 | 都立小金井工業高等学校 | 2 | |
| 13 | 都立農業高等学校 | 10 | |
| 14 | 都立大島高等学校 | 1 | 1 |
| 15 | 都立八丈高等学校 | 2 | |
| 16 | 愛国高等学校 | 10 | 5 |
| 17 | 岩倉高等学校 | 8 | 4 |
| 18 | 蒲田女子高等学校 | 9 | |
| 19 | 国際理容美容専門学校 | 10 | |
| 小計 | | 106 | 16 |
| 1 | 青山製図専門学校 | 10 | 3 |
| 2 | 中央工学校 | 2 | 1 |
| 3 | 二葉栄養専門学校 | 1 | |
| 4 | 日本工学院八王子専門学校 | 10 | 1 |
| 小計 | | 23 | 5 |
| 計 | | 129 | 21 |

（まとめ）

| 校　　数　（入選校数） | 応募数 | 入選数 |
|---|---|---|
| 中 学 校　28 校　（12 校） | 134 | 19 |
| 高 校 等　19 校　（ 7 校） | 106 | 16 |
| 専修学校　4 校　（ 3 校） | 23 | 5 |
| 総　　計　51 校　（22 校） | 263 | 40 |

## 平成二十六年度　作文選考委員名簿（順不同・敬称略）

東京都立府中工業高等学校長（高校・専修の部　委員長）　瀧澤　勝
東京都立農産高等学校長　並川直人
東京都立江東商業高等学校長　高橋　進
東京都立鷺宮高等学校長　石坂敦子
東京都立王子総合高等学校長　庄司一也
日本工業大学駒場高等学校教諭　竹内　真
安部学院高等学校長　安部元彦
国際理容美容専門学校教頭　佐谷肇
足立区立第十二中学校長（中学校の部　委員長）　杉浦伸一
小平市立小平第十五小学校長　熊井久乃
青梅市立泉中学校長　髙橋章次
立川市立第四小学校長　大神田佳明
葛飾区立一之台中学校長　入山賢一
足立区立江南中学校長　宮下みどり
板橋区立上板橋第三中学校長　坂詰悦子
中野区立第七中学校副校長　深井明美
新宿区立牛込第三中学校副校長　寺島京子
荒川区立赤土小学校副校長　出井玲子
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事　鈴木　誠
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事　平柳伸幸
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事　吉川泰弘
東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事　馬場一平

# あとがき

作品集「明日に生きる」第二十五号発行にあたり、応募くださった多くの皆さんの努力はもとより、それぞれの学校でご指導いただきました先生方、選考委員の諸先生方及び関係の皆様方のご協力、ご尽力に心より感謝申し上げます。

本年度は、中学校の部一三四編、高等学校の部一〇六編、専修学校の部二三編、合計二六三編の応募がありました。応募数全体では昨年度より一七編の減少でしたが、入選数は昨年度とほぼ同数の四〇編でした。

作文コンクールの表彰式は、平成二十六年十二月十九日に都庁・都民ホールを会場として、本会役員及び選考委員の出席のもと、保護者の方々や引率の先生方の参加をいただき行いました。

作品集の作成において、編集では人権に配慮するとともに、事実誤認を除き「原文尊重」を基本といたしました。誤字や脱字についても、明らかなものについては直させて頂きましたがその他は原文通りです。

生徒や学生の皆さんからは、日々の学習活動や様々な体験の中から学び得たことや自己の在り方や将来の職業観につなげるものがたくさん寄せられました。これからもより多くの皆さんの応募を期待しております。

また、この作品集が会員校はもとより、教育諸機関等において広く活用されることを願っております。

# 明日に生きる　第二十五号

―作文コンクール入選作品集―

平成二十七年三月一日　発行

発　行　東京都産業教育振興会

〒一六三―八〇〇一　東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電　話　〇三―五三二〇―六七二九
ＦＡＸ　〇三―五三八八―一七二七

印　刷　株式会社小薬印刷所